



日産化学株式会社

2023年3月期 決算説明会

説明者

代表取締役 取締役社長 COO 八木晋介

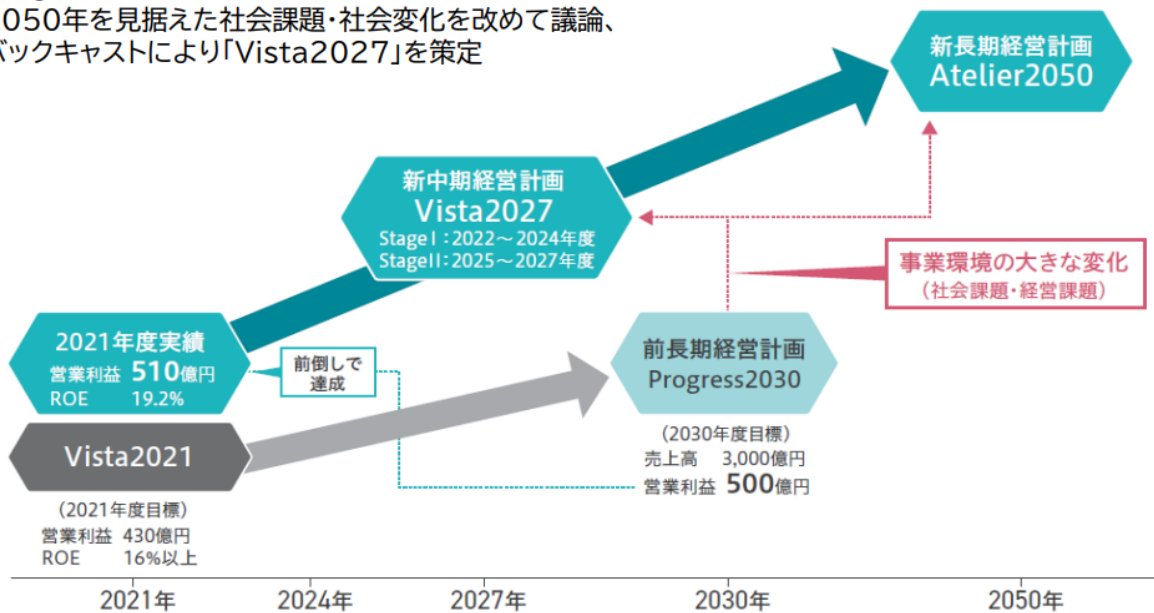
取締役 専務執行役員 CFO 大門秀樹

2023年5月15日

長期経営計画「Atelier2050」と中期経営計画「Vista2027」



Progress2030策定当時より事業を取り巻く環境が大きく変化したため、2050年を見据えた社会課題・社会変化を改めて議論、バックキャストにより「Vista2027」を策定



| 2

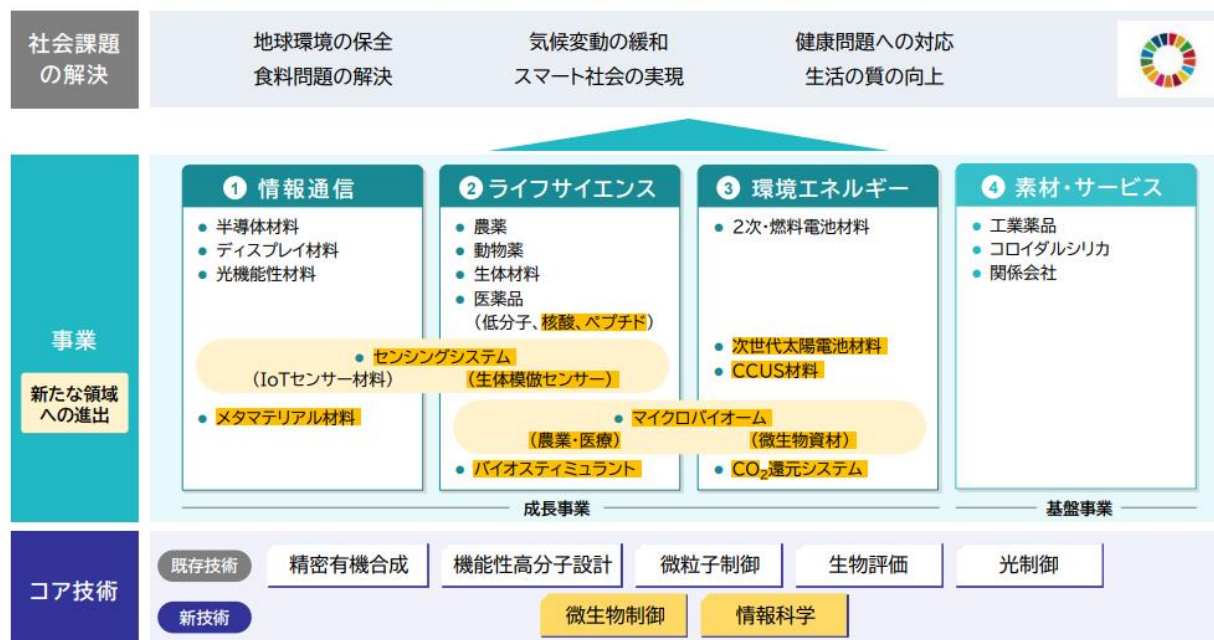
八木：皆さん、こんにちは。社長の八木でございます。本日はご多忙のところ、弊社決算説明会にご出席いただき、誠にありがとうございます。

はじめに私から昨年4月にスタートした中期経営計画 Vista2027 の進捗について、ご説明いたします。

最初に Vista2027 と長期経営計画 Atelier2050 の策定方法について、ご説明いたします。

当社は、前長期経営計画 Progress2030 を 2016 年に始動しました。しかし、Progress2030 策定当時より事業を取り巻く環境が大きく変化したため、2050 年を見据えた社会課題、社会変化を改めて議論し、2050 年に視座を高めた Atelier2050 を策定しました。そして、そこからバックキャストにより、Atelier2050 に掲げた企業像に至る通過点として Vista2027 を策定しました。

既存のコア技術に加え、新技術を獲得し、3つの成長事業に関する新たな領域に進出
コア技術の深化と融合により各事業領域の成長を加速させ、社会課題解決に貢献する



Atelier2050 では、2050 年のあるべき姿として、事業領域は情報通信、ライフサイエンス、環境エネルギーを成長事業領域、素材・サービスを基盤事業領域と決めました。

そして、既存のコア技術に加え、微生物制御、情報科学という新技術を獲得することで3つの成長事業に関する新たな領域に進出します。コア技術の進化と融合により各事業領域の成長を加速させ、社会課題解決への貢献を目指します。

2027年の当社の姿

現有事業が業績を力強く牽引し、事業領域の拡充に向け、新たなコア技術を確実に修得している

サステナビリティに関わる取り組みが組織的に進められ、その関連情報を社内外に発信している

デジタル基盤の構築が進められ、顧客・市場等の最新情報に基づいて業務が進められている

2027年の売上高・利益目標、財務・非財務指標

売上高:2,850億円
営業利益:670億円
財務指標:ROE 18%以上など
非財務指標:日産化学サステナブルアジェンダ55%以上維持

Vista2027 基本戦略

事業領域の深掘りと
マーケティング力の向上

サステナブル経営の推進

価値創造・共創プロセス
の強化

現有事業のシェア・利益
の拡大

| 4

Vista2027 では、2027 年のあるべき姿として、「現有事業が業績を力強く牽引し、事業領域の拡充に向け、新たなコア技術を確実に修得している」、「サステナビリティに関わる取り組みが組織的に進められ、その関連情報を社内外に発信している」、「デジタル基盤の構築が進められ、顧客・市場等の最新情報に基づいて業務が進められている」と描き、27 年度の売上高を 2,850 億円、営業利益を 670 億円と計画しました。

そして、前中計 Vista2021 で認識した課題と 2027 年の姿を踏まえ、「基本戦略として事業領域の深掘りとマーケティング力の向上」、「サステナブル経営の推進」、それから「価値創造・共創プロセスの強化」、「現有事業のシェア・利益の拡大」、この 4 つを設定しました。

進捗

- 新たなコア技術 微生物制御技術の育成
・生科研バイオリジカルG創設(2022年4月1日)
- 動物用医薬品開発・販売体制構築の検討
・企画本部にアニマルケア企画グループを新設(2023年4月1日)
- デジタル技術を活用した研究開発の推進
・実テーマでのMI(マテリアルズインフォマティクス)検証実施
- 新材料技術の導入
・Arieca社との協業を開始(同社への出資とTIM*技術の導入)

*TIM 高性能熱伝導材料(サーマルインターフェース マテリアル)

| 5

このページからは各戦略に基づく諸施策の進捗について説明します。

第1の戦略、「事業領域の深掘りとマーケティング力の向上」では、新たなコア技術、微生物制御技術の育成に向け、昨年4月、生物科学研究所にバイオリジカルグループを創設しました。

また本年4月、動物用医薬品の開発・販売体制構築を検討するため、企画本部にアニマルケア企画グループを新設しました。

研究開発でのデジタル技術の活用は、実テーマでのMI(マテリアルズインフォマティクス)検証を進めました。

また、社外からの技術導入では、昨年4月、Arieca社との協業を開始し、TIM技術を導入しました。

日産化学サステナブルアジェンダ

社会課題解決に貢献する製品・サービスの提供により、
「地球と人の未来のためにできること」を追求する計画



次に第2の戦略、「サステナブル経営の推進」では日産化学サステナブルアジェンダを始動。中計各年度の目標として、社会課題解決に貢献する製品・サービスの売上高割合を全体売上高に対し55%以上を維持と掲げております。

進捗

- 日産化学サステナブルアジェンダの始動
 - ・22年度 全体売上に対する対象製品・サービスの売上 55%以上維持
- 気候変動対策に関する取組み
 - ・気候変動対策委員会の設置(2022年6月)
 - ・ICP(インターナルカーボンプライシング)の設定と活用

| 7

昨年度の実績です。日産化学サステナブルアジェンダの対象製品・サービスの売上高は全体売上高の55%以上となりました。

また、サステナブル経営の推進では、気候変動対策に関する取り組みとして昨年6月、気候変動対策委員会を設置、ICPの活用に向けた検討を進めました。

進捗

- 人事制度の刷新と人材育成
 - ・役割等級制度の導入(適所適材で人材を登用し適切に処遇)
 - ・キャリア開発の仕組みづくりの検討(人材育成の強化)

- 経営・業務基盤改革の推進
 - ・デジタル改革推進部を新設(2022年4月1日)
 - ・全社のDX基盤整備の開始(人・ルール・デジタル)

| 8

第3の戦略、「価値創造・共創プロセスの強化」では人事制度を刷新、適所適材で人材を登用し、適切な処遇を図るため、役割等級制度を導入しました。また、人材育成の強化に向け、キャリア開発の仕組みづくりの検討を進めています。

経営・業務基盤改革の推進では昨年4月、デジタル改革推進部を新設。Vista2027の後半3カ年、Stage IIでのデータ駆動型体制に向け、全社のDX基盤整備を開始しました。

現有製品を成長の源泉の主軸とし、次世代の成長の源泉となる新製品も育成

進捗

- 化学品
 - ・メラミン撤退後の構造改革 アンモニア系事業の収益性の改善施策推進
 - ・VOC CO₂削減に向けたバイオ燃料などのプロジェクトに参画
VOC:ピーナス®オイルクリーン
- 機能性材料 ディ스플레이材料
 - ・光IPS シェア堅持
 - ・ラビングIPS 大型TV用途での採用獲得
 - ・次世代ディスプレイ向け材料の開発力強化
- 機能性材料 半導体材料
 - ・EUV材料の開発力強化
 - ・多層材料、実装材料のシェア拡大に向けた開発・営業展開
 - ・NCK 唐津工場 建設は順調に進捗
 - ・NCK R&Dセンター半導体材料部門 新設(2023年4月1日)

| 9

第4の戦略、「現有事業のシェア・利益の拡大」では27年度の目標達成を目指し、現有製品を成長の源泉の主軸とし、次世代の成長の源泉となる新製品も着実に育成していきます。

まず化学品はメラミン撤退後の構造改革として、アンモニア系事業の収益性の改善を進めています。また、微生物製剤ピーナスオイルクリーンは、これまでの油脂排水処理用途での市場開拓に加え、CO₂削減を企図したプロジェクトに参画しました。

機能性ディスプレイでは、光IPSのシェア堅持、ラビングIPSの大型テレビ用途での採用獲得などに加え、次世代ディスプレイ向け材料の開発力を強化しました。

機能性半導体では、伸長が見込まれるEUV材料の開発力を強化、そして多層材料、実装材料のシェア拡大に向けた開発、営業展開を着実に進めました。

韓国NCKは、半導体材料の供給体制強化を目的とした唐津工場の建設が順調に進捗しました。そして、本年4月にはR&Dセンターに半導体材料部門を新設しました。

進捗

- 機能性材料 無機コロイド材料
 - ・Oil&Gas材の拡販
 - ・CCS材の開発 共同研究の開始
- 農業化学品
 - ・NBR(Nissan Bharat Rasayan)商業稼働を開始(2023年3月)
 - ・グレース グローバル展開の推進
 - ・ラウンドアップ 専用ノズルULV5やソーシャルメディアを活用した拡販
 - ・小野田工場 新規除草剤原体 NC-653のプラント建設は順調に進捗
- ヘルスケア
 - ・核酸医薬 開発候補化合物でnon-GLP試験の実施を開始
 - ・生体材料 Heartseed社が治験のために実施した細胞塊の製造で prevelex[®] を使用

| 10

機能性無機コロイドでは、Oil&Gas 材の拡販、CCS 剤の共同研究開始など一定の進捗が得られました。

農業化学品では、NBR のプラントが完成、本年 3 月に商業稼働を開始しました。

また、グレースはグローバル展開を推進。ラウンドアップは、専用ノズルやソーシャルメディアを活用し、拡販を進めています。さらに、将来の成長エンジンとなる新規除草剤原体 NC-653 のプラントの建設も順調に進捗しました。

ヘルスケアでは、核酸医薬で開発候補化合物の non-GLP 試験を開始し、生体材料で Heartseed 社が治験のために実施した細胞塊の製造で当社材料が用いられるなど、一定の進捗が得られました。

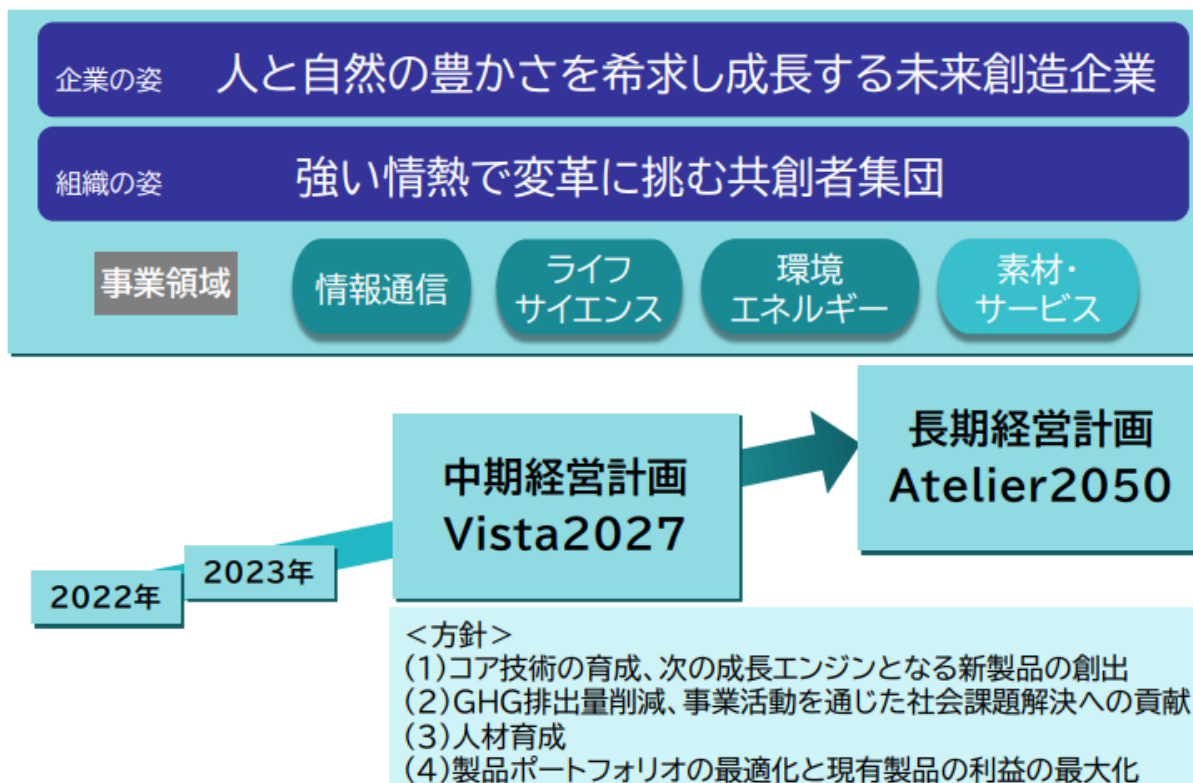


新たにインドに建設された農業化学品の工場(NBR)

| 11

こちらに示した写真は、この3月に商業稼動を開始したインドNBRの全体写真です。

以上、説明しましたように昨年4月にスタートした経営計画は、各戦略に基づく諸施策を着実に進めております。



当社グループは「社会が求める価値を提供し、地球環境の保護、人類の生存と発展に貢献する」という企業理念のもと、Atelier2050、そして Vista2027 を策定し、これまで各戦略に基づく諸施策を実施してきております。

今後も経営計画の達成に向け、コア技術の育成と次の成長エンジンとなる新製品の創出、温室効果ガス排出量の削減と事業活動を通じた社会課題解決への貢献、人材育成、そして製品ポートフォリオの最適化と現有製品の利益の最大化を方針とし、施策を着実に実施していきます。

私からは以上となります。

下期	前年同期比	<ul style="list-style-type: none"> ■ 売上高は、24億円増収(+2%) ■ 営業利益は、56億円減益(-19%) ■ 純利益は、51億円減益(-23%)
通期	前年同期比	<ul style="list-style-type: none"> ■ 売上高は、201億円増収(+10%) ■ 営業利益は、13億円増益(+3%) ■ 純利益は、23億円増益(+6%) ■ 営業利益・経常利益は9年連続、純利益は10年連続、過去最高益を更新
通期	業績予想比 <small>(2023年2月発表予想 =4Q予想との比較)</small>	<ul style="list-style-type: none"> ■ 売上高は、14億円下ぶれ ■ 営業利益は、11億円下ぶれ ■ 純利益は、10億円下ぶれ
株主還元		<ul style="list-style-type: none"> ■ 通期配当164円(前年比42円増配)、11年連続増配 ■ 自己株式取得 90億円完了(1,356千株) ■ 配当性向56.3%(中計目標55%)、総還元性向78.0%(同75%)

大門：それでは私からパート2ということで、決算数値に即してご説明いたします。資料で言いますと4ページからご説明いたします。22年度通期決算サマリー、下期前年同期比の数字でございます。

上段でございますように売上高では24億円の増収、プラス2%。一方、営業利益は56億円の減益、マイナス19%となっております。これは化学品あるいは機能性といったところが主因でございます。また純利益も51億円の減益でございます。

通期でございます。前年同期比、売上高はプラス10%の201億円の増収。営業利益はプラス3%の13億円の増益。純利益はプラス6%の23億円の増益でございます。青字で書いてございますとおり、営業利益、経常利益は9年連続、純利益は10年連続の過去最高益を更新となりました。

また3つ目の箱でございます業績予想比です。これは先般2月に発表いたしました数値との比較でございます。具体的には1-3月の3カ月分の予想との比較でございます。

売上高は14億円の減収、営業利益で11億円の減収です。ここは機能性材料、特に半導体での減収が効いております。純利益は10億円の減収となりました。

最後に株主還元でございます。通期配当は2月の発表どおり164円、前年対比で42円の増配。これをもちまして11年連続の増配となります。また自己株取得も2月の発表どおり90億円の取得を完了済みでございます。この結果、配当性向は中計目標55%を若干上回ります56.3%、総還元性向は78%となった次第でございます。

2022年度通期決算サマリー 前年同期比



(億円)

	2021年度 実績					2022年度 実績					前年同期比				
	上期	3Q	4Q	下期	年間	上期	3Q	4Q	下期	年間	上期	3Q	4Q	下期	年間
売上高	918	495	667	1,162	2,080	1,095	497	689	1,186	2,281	+177 (+19%)	+2 (0%)	+22 (+3%)	+24 (+2%)	+201 (+10%)
営業利益	213	126	171	297	510	282	106	135	241	523	+69 (+32%)	-20 (-16%)	-36 (-21%)	-56 (-19%)	+13 (+3%)
営業外損益	10	9	8	17	27	38	-13	10	-3	35	+28	-22	+2	-20	+8
為替差損益	1	2	8	10	11	30	-21	4	-17	13	+29	-23	-4	-27	+2
経常利益	223	135	179	314	537	320	93	145	238	558	+97 (+44%)	-42 (-31%)	-34 (-19%)	-76 (-24%)	+21 (+4%)
特別損益	0	2	3	5	5	0	0	8	8	8	0	-2	+5	+3	+3
純利益 ^{※1}	163	93	132	225	388	237	71	103	174	411	+74 (+45%)	-22 (-24%)	-29 (-21%)	-51 (-23%)	+23 (+6%)
EBITDA ^{※2}	260	152	200	352	612	333	135	165	300	633	+73	-17	-35	-52	+21
EPS(円/株)	113.94	65.64	92.30	157.94	271.88	167.74	50.25	73.37	123.62	291.36	+53.80	-15.39	-18.93	-34.32	+19.48
配当(円/株)	50	-	-	72	122	70	-	-	94	164	+20	-	-	+22	+42
配当性向(%)	-	-	-	-	44.9%	-	-	-	-	56.3%	-	-	-	-	+11.4pt
配当総額	71	-	-	102	173	99	-	-	132	231	+28	-	-	+30	+58
売上高営業利益率	23.2%	25.5%	25.5%	25.5%	24.5%	25.7%	21.4%	19.6%	20.4%	22.9%	+2.5pt	-4.1pt	-5.9pt	-5.1pt	-1.6pt
ROE	-	-	-	-	19.2%	-	-	-	-	19.4%	-	-	-	-	+0.2pt
為替レート(円/%)	110	114	116	115	112	134	141	132	137	136	-	-	-	-	-
原油(JCC)(\$/bbl) ^{※3}	70	80	86	83	77	112	100	87	94	103	-	-	-	-	-

※1 純利益は、親会社株主に帰属する純利益を指す ※2 EBITDA = 営業利益 + 減価償却費 ※3 実績は財務省貿易統計ベース

続きまして5ページでございます。

ここは具体的な数字が並んでおります。特に真ん中の22年度実績という青地の白抜きで年間をご覧いただきます。売上高2,281億円、営業利益は523億円、営業外損益で35億円、うち為替差損益で13億円でございます。この結果、経常利益は558億円、また特別損益では8億円のプラス、純利益は411億円となりました。

配当は先ほど申し上げましたとおり、42円増配の164円、また配当性向は56.3%、OPマージンは全社として22.9%でございます。またROEは19.4%で中計目標の18%をクリアしました。

為替レートは通年で136円という実績でございます。原油JCCはご覧のとおり103ドルです。相当、調達コストアップしてございます。

2022年度決算通期サマリー 前回業績予想比

(億円)

	2022年度 予想 (2023年2月発表)			2022年度 実績			業績予想比
	1-3Q	4Q	年間	1-3Q	4Q	年間	4Q
売上高	1,592	703	2,295	1,592	689	2,281	-14
営業利益	388	146	534	388	135	523	-11
営業外損益	25	-4	21	25	10	35	+14
為替差損益	9	-12	-3	9	4	13	+16
経常利益	413	142	555	413	145	558	+3
特別損益	0	15	15	0	8	8	-7
純利益 ^{※1}	308	113	421	308	103	411	-10
EBITDA ^{※2}	468	181	649	468	165	633	-16
EPS(円/株)	217.99	80.62	298.61	217.99	73.37	291.36	-7.25
配当(円/株)	70	94	164	70	94	164	0
配当総額	99	132	231	99	132	231	0
売上高営業利益率	24.4%	20.8%	23.3%	24.4%	19.6%	22.9%	-0.4pt
ROE	-	-	19.7%	-	-	19.4%	-0.3pt
為替レート(円/ドル)	137	130	135	137	132	136	-
原油(JCC)(%/bbl) ^{※3}	108	100	106	108	87	103	-

※1 純利益は、親会社株主に帰属する純利益を指す

※2 EBITDA = 営業利益 + 減価償却費

※3 実績は財務省貿易統計ベース

| 6

6 ページは前回の業績予想比でございます。後ほどご覧ください。

営業利益の増減分析

※1 前回業績予想比=4Q予想比

	2022年度 実績	2021年度 実績	前年同期比	前回予想(2023年2月発表)	前回業績予想比 ^{※1}
	523 億円	510 億円	+13 億円(+3%)	534 億円	-11 億円
通期	化学品	前年同期比 -24億円	メラミン(終売)・テビックの減収、原燃料高		
		業績予想比 3億円下ぶれ	テビックの下ぶれ、原燃料高		
	機能性材料	前年同期比 -22億円	ディスプレイの減収、固定費増加		
		業績予想比 8億円下ぶれ	ディスプレイ予想通り、半導体下ぶれ		
農業化学品	前年同期比 +50億円	主要製品の販売好調			
	業績予想比 4億円下ぶれ	在庫変動影響(減益要因)により利益下ぶれ			
ヘルスケア	前年同期比 +2億円	ファインテックの増収			
	業績予想比 1億円上ぶれ	固定費下ぶれ			
	2022年度 実績	2021年度 実績	前年同期比		
	241 億円	297 億円	-56 億円(-19%)		
下期	化学品	前年同期比 -23億円	メラミン(終売)・テビックの減収、原燃料高		
	機能性材料	前年同期比 -30億円	ディスプレイの減収、固定費増加		
	農業化学品	前年同期比 -2億円	主要製品の販売好調も、固定費増加により減益		
	ヘルスケア	前年同期比 +1億円	ファインテックの増収		

| 7

7 ページに参ります。ここはセグメント別の営業利益の増減分析でございます。

コメントは少し割愛いたしますけれども、上段が通期でございます。

まず化学品、前年同期比では 24 億円の減益。理由はそこに記載のとおりでございます。業績予想比では 3 億円の**下ぶれ**。

また機能性材料も前年同期比では 22 億円の減益でございます。ここは特にディスプレイでの減収、売上で言えばマイナス 12%になりましたが、これに加えまして固定費の増加も効いております。また業績予想比は 2 月の予想値との比較で 8 億円の**下ぶれ**。特に半導体でございます。ディスプレイはほぼ予想どおりでございます。

続きまして農業化学品は前年同期比プラス 50 億円。ここが大きな牽引役となりました。一方、業績予想比では 4 億円の**下ぶれ**です。

ヘルスケアは記載のとおりでございます。

下段の下期の YoY も記載のとおりでございます。後ほどご覧ください。

2023年度通期業績予想

上期	前年同期比
----	-------

- 売上高は9億円減収(-1%)
- 営業利益は21億円減益(-7%)(うち1Qで28億円減益)
- 純利益は40億円減益(-17%)(為替差損益(営業外損益)30億円減益※1)

※1 p12参照

通期	前年同期比
----	-------

- 売上高は92億円増収(+4%)
- 営業利益は24億円増益(+5%)
- 純利益は4億円増益(+1%)
- 営業利益は10年連続、純利益は11年連続、過去最高益を更新
- ROE予想は18.6%

株主還元予想

- 中計目標に基づき、総還元性向目標は75%、配当性向目標は55%
- 自己株式取得50億円を発表

配当	通期164円 中間70円、期末94円、配当性向55.1% 【前年比】据え置き
自己株式取得	50億円 ● 2023年5月15日発表分 50億円(2023年5~7月)(2022年度実績 90億円、1,356千株)
自己株式消却	70万株消却済(2023年5月)
総還元性向目標	75%(配当164円と自己株式取得50億円に基づけば67.1%)

| 9

続きまして、9 ページ、23 年度通期の業績予想サマリーでございます。

上段にございます上期の前年同期比で申し上げます。売上高は9億円の減収、営業利益はマイナス7%の21億円減益でございます。カッコに書いてございますように1Qで28億円の減益となります。純利益は40億円の減益でございます。こちらもカッコ内に記載のとおり、営業外損益、特に為替差損益が30億円、YoYで減益となります。後ほど12ページでご説明いたします。

一方、通期はYoYで売上高92億円増収、営業利益はプラス5%、24億円の増益でございます。純利益は4億円の増益でございます。営業利益は10年連続、純利益は11年連続の過去最高益更新を想定します。なお経常利益は3億円の減益という計画となっております。ROEは18.6%を想定しております。

続きまして株主還元でございます。本日発表いたしましたとおり、自己株50億円を今後、取得してまいります。また配当はその下の青字で書いてございますとおり、164円を通期で実施し、前年比で据え置きます。

自己株の消却については、5月12日に既に70万株消却済みでございます。総還元性向目標は75%でございます。足元、50億円の自己株取得と配当164円を合わせますと、現段階では67.1%という数字となっております。

2023年度業績予想サマリー 前年同期比



(億円)

	2022年度 実績					2023年度 業績予想					前年同期比				
	1Q	2Q	上期	下期	年間	1Q	2Q	上期	下期	年間	1Q	2Q	上期	下期	年間
売上高	583	512	1,095	1,186	2,281	548	538	1,086	1,287	2,373	-35 (-6%)	+26 (+5%)	-9 (-1%)	+101 (+9%)	+92 (+4%)
営業利益	173	109	282	241	523	145	116	261	286	547	-28 (-16%)	+7 (+6%)	-21 (-7%)	+45 (+19%)	+24 (+5%)
営業外損益	22	16	38	-3	35	7	-4	3	5	8	-15	-20	-35	+8	-27
為替差損益	17	13	30	-17	13	0	0	0	0	0	-17	-13	-30	+17	-13
経常利益	195	125	320	238	558	152	112	264	291	555	-43 (-22%)	-13 (-10%)	-56 (-17%)	+53 (+22%)	-3 (-1%)
特別損益	0	0	0	8	8	0	6	6	6	12	0	+6	+6	-2	+4
純利益 ^{※1}	139	98	237	174	411	109	88	197	218	415	-30 (-21%)	-10 (-10%)	-40 (-17%)	+44 (+25%)	+4 (+1%)
EBITDA ^{※2}	197	136	333	300	633	-	-	319	357	676	-	-	-14	+57	+43
EPS(円/株)	98.13	69.61	167.74	123.62	291.36	-	-	140.74	156.87	297.61	-	-	-27.00	+33.25	+6.25
配当(円/株)	-	-	70	94	164	-	-	70	94	164	-	-	0	0	0
配当性向(%)	-	-	-	-	56.3%	-	-	-	-	55.1%	-	-	-	-	-1.2pt
配当総額	-	-	99	132	231	-	-	98	131	229	-	-	-1	-1	-2
売上高営業利益率	29.6%	21.3%	25.7%	20.4%	22.9%	26.5%	21.6%	24.0%	22.2%	23.1%	-3.1pt	+0.3pt	-1.7pt	+1.8pt	+0.2pt
ROE	-	-	-	-	19.4%	-	-	-	-	18.6%	-	-	-	-	-0.8pt
為替レート(円/%)	130	138	134	137	136	128	128	128	128	128	-	-	-	-	-
原油(JCC)(%/bbl) ^{※3}	111	113	112	94	103	92	92	92	92	92	-	-	-	-	-

※1 純利益は、親会社株主に帰属する純利益を指す ※2 EBITDA = 営業利益 + 減価償却費 ※3 実績は財務省貿易統計ベース

| 10

具体的な数字、10ページでございます。

同じように中段の青地に白抜きで23年度年間を見ていただきますと、売上高では2,373億円、営業利益では547億円、為替差損益は期初でゼロとおいており、営業外で8億円です。結果、経常利益は555億円、特別損益は後ほど申し上げますが、12億円の利益を見ております。その結果、純利益として415億円を想定しております。

またEBITDAは右にございますように、43億円増加の676億円でございます。OPマージンは23.1%、それから為替レートは通期を通して128円と想定しております。原油JCCは92ドルと若干コストダウンとなります。

営業利益の増減分析

上期	2023年度 予想	2022年度 実績	前年同期比
		261 億円	282 億円
	化学品	前年同期比 +1億円	メラミン(終売)・テビックの減収、原燃料高も、固定費減、在庫変動影響(増益要因)により増益
	機能性材料	前年同期比 -12億円	半導体の減収、固定費増加
	農業化学品	前年同期比 -1億円	グレーシア・ラウンドアップの増収も、固定費増加により減益
	ヘルスケア	前年同期比 横ばい	

通期	2023年度 予想	2022年度 実績	前年同期比
		547 億円	523 億円
	化学品	前年同期比 +18億円	メラミン(終売)の減収も、尿素・アドブルー、硝酸製品、環境化学品で増収
	機能性材料	前年同期比 +11億円	ディスプレイ、無機の増収
	農業化学品	前年同期比 +5億円	グレーシア・アルテア・ラウンドアップの増収
	ヘルスケア	前年同期比 -7億円	リパロ・ファインテックの減収

続きまして 11 ページ、セグメント別の営業利益の増減でございます。

上段、上期 YoY でございます。会社全体でマイナス 21 億円でございます。機能性材料は 12 億円の減益という想定でございます。特に半導体を中心に減収、また固定費の増加も見込んでおります。

一方、通期でございます。下段にございますように化学品、機能性材料、農業化学品、それぞれ前年同期比で増益を想定しております。後ほど申し上げますが、機能性材料はディスプレイ、半導体も下期から回復すると想定しております。ヘルスケアはこの期、7 億円の減益という想定でございます。

営業外損益・特別損益の内訳

(億円)

	2021年度 実績			2022年度 実績			前年同期比			2022年度 予想 ^{※4}	2023年度 予想		
	上期	下期	年間	上期	下期	年間	上期	下期	年間	年間	上期	下期	年間
受取利息・配当金	3.2	5.0	8.2	4.5	10.8	15.3	+1.3	+5.8	+7.1	14.6	3.6	7.4	11.0
持分法投資損益	4.6	4.9	9.5	6.2	8.7	14.9	+1.6	+3.8	+5.4	17.7	6.5	4.5	11.0
為替差損益 ^{※1}	1.0	10.3	11.3	30.2	-17.2	13.0	+29.2	-27.5	+1.7	-3.1	0.0	0.0	0.0
支払利息	-0.5	-0.2	-0.7	-0.9	-1.6	-2.5	-0.4	-1.4	-1.8	-2.5	-2.8	-2.5	-5.3
固定資産処分損他	1.1	-2.1	-1.0	-1.7	-3.9	-5.6	-2.8	-1.8	-4.6	-6.2	-5.1	-3.8	-8.9
営業外損益	9.4	17.9	27.3	38.3	-3.2	35.1	+28.9	-21.1	+7.8	20.5	2.2	5.6	7.8
特別利益	28.2	5.5	33.7	0.0	14.6	14.6	-28.2	+9.1	-19.1	15.0	6.0	6.0	12.0
特別損失	-27.9	-1.1	-29.0	0.0	-6.5	-6.5	+27.9	-5.4	+22.5	0.0	0.0	0.0	0.0
特別損益^{※2・3・4・5}	0.3	4.4	4.7	0.0	8.1	8.1	-0.3	+3.7	+3.4	15.0	6.0	6.0	12.0

※1 為替レート(円/%)：21/3末 110.72、21/9末 111.95、22/3末 122.41、22/9末 144.81、23/3末 133.54

※2 2021年度年間実績：

特別利益+33.7億円(有価証券売却益33.7億円・売却額43.3億円、9銘柄(うち3銘柄保有全株数売却)、非上場株を含む)

特別損失-29.0億円(メラミン構造改善費用17.9億円、日本磷酸設備撤去費用6.3億円、出資先(非上場会社)にかかる保有株式減損4.8億円)

※日本磷酸：当社関連会社(出資比率35%)、硫酸および磷酸液の製造・販売。磷酸液の製造停止決定に伴い、出資比率に応じて設備撤去費用等を負担

※3 2022年度年間実績：

特別利益+14.6億円(有価証券売却益14.6億円・売却額25.3億円、7銘柄(うち4銘柄保有全株数売却)、非上場株を含む)

特別損失-6.5億円(出資先(非上場会社)にかかる保有株式減損6.5億円)

※4 2022年度年間予想(2023年2月発表)：

特別利益+15.0億円(有価証券売却益15.0億円)

※5 2023年度年間予想：

特別利益+12.0億円(有価証券売却益12.0億円)

| 12

次、12ページでございます。先ほど少し申し上げました営業外損益、特に為替差損益をお示ししております。

上から3行目の為替差損益で少し細かいですが、22年度実績で上期が30.2億円と大きくプラスが出ております。これに対しまして23年度の上期は一番右から3列目でございますとおり、ゼロでございます。前年同期では上期で30億円の減益となります。

ここの数字につきまして下の米印1に少し細かく、3月末、9月末の為替レート、ドル円を記載してございます。ご覧いただければわかるように、22年3月末から22年9月末にかけて大きくドル高に動いた後、3月末では133円と円高に少し戻っている状況でございます。この辺が上の数字に出ているとご理解ください。

また特別損益でございます。22年度実績は先ほど少し申し上げましたが、8億円でございます。特別利益は政策保有株式の売却等で14.6億円、一方、特別損失として6.5億円です。これは下の米印3に少し細かく書いてございます。出資先非上場会社には保有株式減損が発生しております。今期は右にございますとおり、特損は予定しておらず、特別利益は政策保有株式の売却等で12億円の計上予定でございます。

キャッシュ・フロー

運転資金や設備投資の増加により、2022年度のフリー・キャッシュ・フローは155億円となり、前年同期比140億円の減少

	2021年度 実績	2022年度 実績	前年同期比	2022年度 予想 (2022年11月発表)	2023年度 予想
営業活動によるキャッシュ・フロー	419	352	-67	454	452
税金等調整前純利益	542	566	+24	583	562
特別損益(マイナスは益)	-5	-8	-3	0	-12
減価償却費※1	102	110	+8	115	129
法人税等の支払	-132	-154	-22	-143	-149
運転資金増減他	-88	-162	-74	-101	-78
投資活動によるキャッシュ・フロー	-124	-197	-73	-232	-208
設備投資	-113	-182	-69	-211	-209
投資有価証券購入・売却	41	20	-21	-5	19
その他	-52	-35	+17	-16	-18
フリー・キャッシュ・フロー	295	155	-140	222	244
財務活動によるキャッシュ・フロー	-278	-250	+28	-250	-269
株主還元(配当)	-155	-201	-46	-291	-320
株主還元(自己株式取得)	-120	-90	+30		
借入金増減	-3	42	+45	41	51
その他	0	-1	-1	0	0
現金及び現金同等物に係る換算差額	6	13	+7	0	0
現金及び現金同等物の増減額	23	-82	-105	-28	-25
新規連結に伴う現金及び現金同等物の増加額	0	31	+31	31	0
現金及び現金同等物の残高	347	296	-51	350	271

※1 のれん償却費を含む

| 13

続きまして 13 ページ、キャッシュ・フローでございます。

表は左から 3 列目、22 年度実績を見ていただきます。運転資金増加、あるいは設備投資の増加で 22 年度フリー・キャッシュ・フローは 155 億円、前年同期比では 140 億円の減少となっております。最終的な現預金残高は最終行にございますとおり、296 億円で引き続き余裕のある状態でございます。

一方、23 年度予想は一番右の列に書いてございますとおりです。フリー・キャッシュ・フローも回復しますし、株主還元も今申し上げたものを織り込んでございます。

貸借対照表

	2022年3月末	2023年3月末	前期末比
流動資産	1,753	1,894	+141
現金	347	296	-51
売上債権	800	827	+27
たな卸資産	522	647	+125
その他	84	124	+40
固定資産	1,044	1,093	+49
有形固定資産	532	647	+115
無形固定資産	118	115	-3
投資有価証券	302	273	-29
その他	92	58	-34
資産合計	2,797	2,987	+190

(億円)

	2022年3月末	2023年3月末	前期末比
負債	717	772	+55
買入債務	190	199	+9
借入金	227	273	+46
その他	300	300	0
純資産	2,080	2,215	+135
株主資本 ^{※2}	1,967	2,088	+121
その他有価証券評価差額金	83	77	-6
為替換算調整勘定	9	17	+8
非支配株主持分	21	31	+10
退職給付に係る調整累計額	0	2	+2
負債純資産合計	2,797	2,987	+190

自己資本比率	73.6%	73.1%
D/Eレシオ ^{※3}	-6.1%	-1.1%

投資有価証券(固定資産)の内訳

	2021年3月末	2022年3月末	2023年3月末	前期末比
上場株式 ^{※1} (単体ベース保有銘柄数)	244 (31)	189 (30)	169 (26)	-20 (-4)
非上場株式	27	26	24	-2
関係会社株式	88	87	80	-7
合計	359	302	273	-29

純資産に占める 政策保有株式の割合 ^{※4}	12.4%	9.5%	7.9%
------------------------------------	-------	------	------

※1 22/3末 189 + 取得0 + 売却・評価差額-20 = 23/3末 169
 ※2 株主資本増減 +121 = 純利益411 - 配当その他290
 ※3 D/Eレシオ = (借入金 - 現金預金) / 株主資本
 ※4 政策保有株式(単体ベース、上場株 + 非上場株) / 純資産(連結ベース)
 各期の政策保有株式(単体、億円)は、
 21/3末 248、22/3末 198、23/3末 175

| 14

14 ページ、バランスシートでございます。少し簡単に申し上げます。

左上、資産合計で 190 億円増加、23 年の 3 月末段階、22 年 3 月末比で数字を置いております。この数字は特に棚卸資産で 125 億円ほど増加しております。うち半分が農業化学品です。こちらは売上もかなり伸びましたので、売上対比の保有日数としては特に増えておらず、懸念がない水準とっております。

一方、有形固定資産も韓国あるいはインドなど、先ほど社長の八木から説明があった設備投資が進捗していることで増えてございます。

右上でございますが、純資産は 135 億円増加してございます。その結果、自己資本比率は 73.1% で引き続き健全な財務体質を維持してございます。

左下、投資有価証券の内訳でございます。上場株式は保有銘柄数が 4 銘柄減り、26 銘柄まで絞り込んでおります。この結果、純資産に占める政策保有株式の割合は下に書いてございまして、7.9% ございました。

セグメント別 2022年度通期決算 前年同期比

(億円)

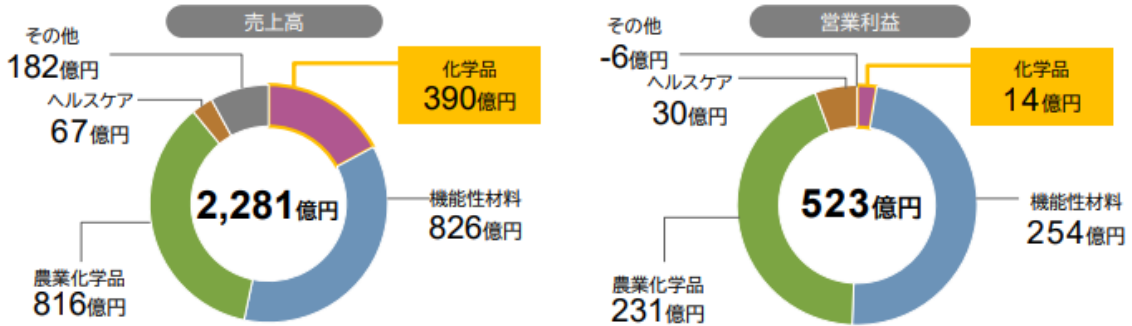
		2021年度 実績					2022年度 実績					前年同期比				
		上期	3Q	4Q	下期	年間	上期	3Q	4Q	下期	年間	上期	3Q	4Q	下期	年間
化学品	売上高	171	105	100	205	376	198	101	91	192	390	+27 (+16%)	-4 (-4%)	-9 (-9%)	-13 (-6%)	+14 (+4%)
	営業利益	12	13	13	26	38	11	4	-1	3	14	-1 (-9%)	-9 (-67%)	-14 (-108%)	-23 (-88%)	-24 (-63%)
機能性材料	売上高	396	209	212	421	817	420	206	200	406	826	+24 (+6%)	-3 (-1%)	-12 (-5%)	-15 (-4%)	+9 (+1%)
	営業利益	131	76	69	145	276	139	69	46	115	254	+8 (+6%)	-7 (-8%)	-23 (-33%)	-30 (-20%)	-22 (-8%)
農業化学品	売上高	250	119	289	408	658	357	131	328	459	816	+107 (+43%)	+12 (+10%)	+39 (+13%)	+51 (+12%)	+158 (+24%)
	営業利益	69	30	82	112	181	121	31	79	110	231	+52 (+75%)	+1 (+3%)	-3 (-3%)	-2 (-2%)	+50 (+28%)
ヘルスケア	売上高	33	20	13	33	66	32	16	19	35	67	-1 (-3%)	-4 (-17%)	+6 (+38%)	+2 (+5%)	+1 (+1%)
	営業利益	14	9	5	14	28	15	6	9	15	30	+1 (+5%)	-3 (-27%)	+4 (+69%)	+1 (+8%)	+2 (+6%)
卸売・その他・調整額	売上高	68	42	53	95	163	88	43	51	94	182	+20	+1	-2	-1	+19
	営業利益	-13	-2	2	0	-13	-4	-4	2	-2	-6	+9	-2	0	-2	+7
合計	売上高	918	495	667	1,162	2,080	1,095	497	689	1,186	2,281	+177 (+19%)	+2 (0%)	+22 (+3%)	+24 (+2%)	+201 (+10%)
	営業利益	213	126	171	297	510	282	106	135	241	523	+69 (+32%)	-20 (-16%)	-36 (-21%)	-56 (-19%)	+13 (+3%)

※ セグメント間の内部売上高又は振替高を含む
 ※ 卸売：日産産業、その他：日産物流・日産緑化・日産エンジニアリング・日本肥種ほか、調整額：企画本部ほか(内訳はp72,p73参照)
 ※ 企画本部の2021年度実績、2022年度実績の売上高・営業利益はp62に記載
 ※ 2021年度実績はセグメント区分変更後の数値に置き換え済み(p75,p76参照)

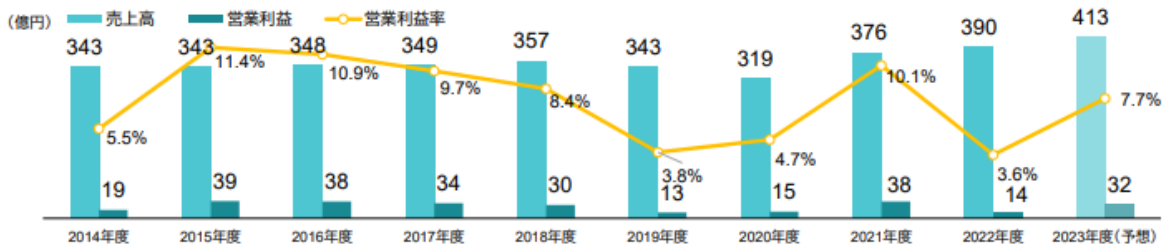
| 19

続きまして、少し飛びましてセグメントの概況、19 ページからセグメントごとに売上、営業利益の比較を載せております。少し細かいですが、以下、セグメントごとに実績と今期見通しを簡単にご説明いたします。

2022年度セグメント別業績



化学品セグメント業績推移※1



※1 2022年4月に組織改定を実施。2014～2020年度実績は旧セグメント区分。2021年度実績はセグメント区分変更後の数値に置き換え済み(p75,p76参照)

まず化学品、22 ページでございます。この下のグラフでございますとおり、22 年度の営業利益は前年対比でかなり減益となり、14 億円。23 年度、今期は 32 億円、18 億円の増益を想定しております。

- ファインケミカルは、2022年度下期で11%減収、2023年度年間では6%増収予想
- 基礎化学品は、2022年度下期で4%減収、2023年度年間で6%増収予想

主要製品	2022年度 実績					2023年度 予想				
	前年同期比					前年同期比				
	上期	3Q	4Q	下期	年間	1Q	2Q	上期	下期	年間
テピック	+25%	-33%	-56%	-44%	-12%	-61%	-26%	-47%	+91%	+1%
環境化学品	+17%	+4%	+28%	+17%	+17%	+15%	+14%	+14%	+17%	+16%
ファインオキシコール	+36%	+8%	-5%	+2%	+16%	-19%	-3%	-11%	+2%	-5%
ファインケミカル合計 ^{※1}	+23%	-8%	-14%	-11%	+5%	-26%	-3%	-15%	+33%	+6%
メラミン ^{※2}	+28%	-85%	-100%	-92%	-49%	-100%	-100%	-100%	-100%	-100%
尿素・アドブルー [®]	+56%	+70%	+54%	+62%	+60%	+40%	+35%	+38%	+3%	+17%
高純度硫酸	+1%	-10%	-15%	-12%	-6%	-12%	-9%	-11%	+16%	+2%
硝酸製品	-14%	+15%	+6%	+10%	-1%	+83%	+25%	+49%	+12%	+27%
基礎化学品合計 ^{※3・4}	+11%	0%	-7%	-4%	+3%	+1%	+9%	+5%	+6%	+6%
	(+8%)	(+22%)	(+15%)	(+19%)	(+14%)	(+30%)	(+22%)	(+26%)	(+8%)	(+16%)
化学品セグメント合計 ^{※3}	+16%	-4%	-9%	-6%	+4%	-10%	+5%	-3%	+15%	+6%
	(+14%)	(+10%)	(+4%)	(+7%)	(+10%)	(+4%)	(+12%)	(+8%)	(+16%)	(+12%)

※1 テピック、環境化学品、ファインオキシコールの2022年度実績ファインケミカル売上高に占める割合: 85%
 ※2 メラミンは2022年6月に生産停止済み(p27参照、メラミン生産停止による構造改革)
 ※3 ()内伸び率は、2021年度実績・2022年度実績ともにメラミンを除く
 ※4 メラミン、尿素・アドブルー[®]、高純度硫酸、硝酸製品の2022年度実績基礎化学品売上高に占める割合: 52%

まず主要製品の売上高でございます。23 ページに成長率をいつもの表で載せております。

22 年度実績の上期、3Q、4Q、下期、年間とあります。それから一つ隣が今期予想の 1Q、2Q、上期、下期、年間です。いずれも YoY の成長率でございます。

冒頭記載のとおり、ファインケミカルは 22 年度下期で 11%減収です。テピックの減収が大きく影響しました。なお 22 年度年間は 5%増収、また今期も 6%の増収を想定しております。

基礎化学品でございます。22 年度下期で 4%の減収。生産停止しましたメラミンの減収分もござい
 ます。22 年度年間は 3%の増収、また 23 年度も 6%の増収を想定しております。

【下期】売上高-13億円(うちメラミン-26億円)、営業利益-23億円
 【年間】売上高+14億円(うちメラミン-21億円)、営業利益-24億円

(億円)

	2021年度 実績					2022年度 実績					前年同期比				
	上期	3Q	4Q	下期	年間	上期	3Q	4Q	下期	年間	上期	3Q	4Q	下期	年間
売上高	171	105	100	205	376	198	101	91	192	390	+27	-4	-9	-13	+14
ファインケミカル	62	37	32	69	131	77	33	28	61	138	+15	-4	-4	-8	+7
基礎化学品	109	68	68	136	245	121	68	63	131	252	+12	0	-5	-5	+7
営業利益	12	13	13	26	38	11	4	-1	3	14	-1	-9	-14	-23	-24

※ 2021年度実績はセグメント区分変更後の数値に置き換え済み(p75,p76参照)

【下期】減収・減益 【年間】増収・減益	
ファインケミカル	テビック一般 【下期】【年間】とも需要減で減収
	テビック電材 【下期】【年間】とも減収
	環境化学品 【下期】【年間】とも価格上昇で増収
	ファインオキシコール 【下期】【年間】とも価格上昇で増収
【下期】原燃料高(減益要因) 【年間】原燃料高、運送費高騰(減益要因)	

【下期】減収・減益 【年間】増収・減益	
基礎化学品	メラミン 【下期】【年間】とも終売で減収(p27参照)
	尿素・アドブルー® 【下期】【年間】とも価格上昇で増収
	高純度硫酸 【下期】【年間】とも半導体市場低調で減収
	硝酸製品 【下期】価格上昇で増収 【年間】横ばい (22年度上期プラントトラブル影響)
【下期】固定費増加3億円、原燃料高(減益要因) 【年間】固定費増加5億円、原燃料高(減益要因)	

| 24

24 ページは 22 年度実績の前年同期比、売上高と営業利益でございます。表はコメントも含めまして、後ほどご覧いただきたいと思っております。年間売上高は 14 億円増収でございましたが、営業利益は 24 億円減益でございました。

いろいろな要素があります。売上高で言えば、メラミンの停止が 21 億円効いております。それ以外にもこの期は原燃料等の高騰がコスト増として効いております。また、固定費も数億円増加しました。

【年間】売上高+23億円、営業利益+18億円

(億円)

	2022年度 実績					2023年度 予想					前年同期比				
	1Q	2Q	上期	下期	年間	1Q	2Q	上期	下期	年間	1Q	2Q	上期	下期	年間
売上高	104	94	198	192	390	94	98	192	221	413	-10	+4	-6	+29	+23
ファインケミカル	42	35	77	61	138	31	34	65	82	147	-11	-1	-12	+21	+9
基礎化学品	62	59	121	131	252	63	64	127	139	266	+1	+5	+6	+8	+14
営業利益	17	-6	11	3	14	9	3	12	20	32	-8	+9	+1	+17	+18

【年間】増収・増益

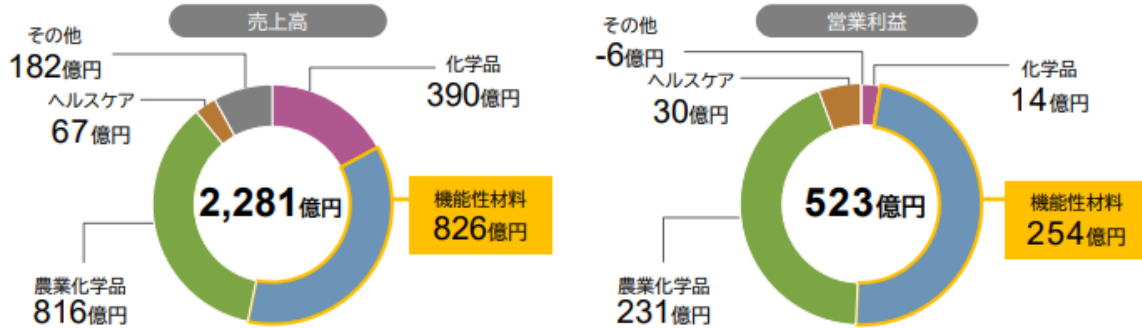
セグメント	増収・増益	
ファインケミカル	テピック一般	横ばい
	テピック電材	下期回復により増収
	環境化学品	数量増により増収
	ファインオキシコール	減収

【年間】増収・増益

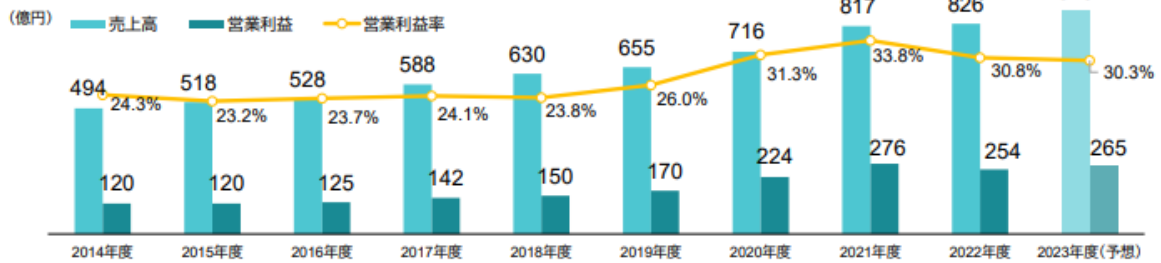
セグメント	増収・増益	
基礎化学品	メラミン	終売で減収(p27参照)
	尿素・アドブルー®	増収(メラミン停止により増販、価格上昇)
	高純度硫酸	価格上昇で増収
	硝酸製品	数量増、価格上昇により増収 (22年度硝酸プラントトラブル影響)

今期は25ページの記載のとおりでございます。売上高で前年同期比23億円の増収、また営業利益では18億円の増益を想定いたします。特に下期はテピックを含めまして回復してくると想定しております。

2022年度セグメント別業績



機能性材料セグメント業績推移※1

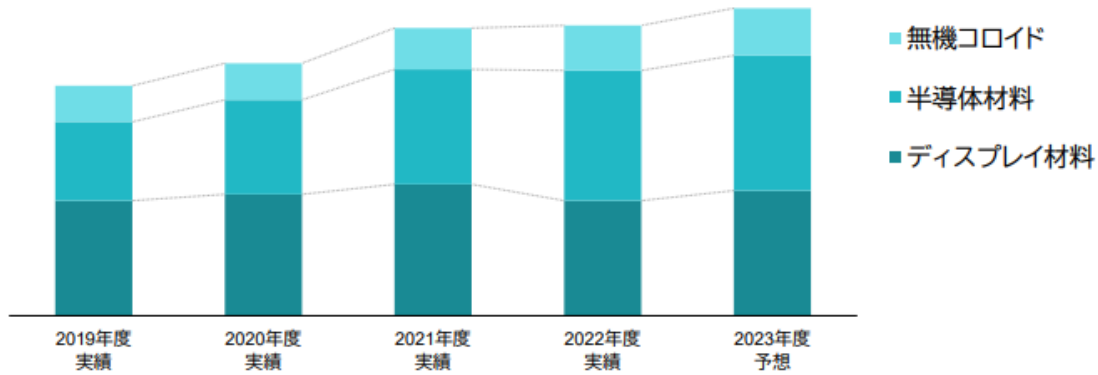


※1 2022年4月に組織改定を実施。2014～2020年度実績は旧セグメント区分。2021年度実績はセグメント区分変更後の数値に置き換え済み(p75,p76参照)

参考 機能性材料R&D説明会 (2022年6月21日発表)

続きまして 28 ページに飛びまして、機能性でございます。

下のグラフのとおり、22年度は前年対比で減益の 254 億円ございました。今期は 11 億円増益の 265 億円という営業利益です。営業利益率で言えば 30%台をキープする想定でございます。



主要製品

ディスプレイ材料		半導体材料		無機コロイド	
サンエバー	液晶配向材用ポリイミド	ARC®	半導体用反射防止コーティング材	スノーテックス	研磨剤(シリコンウェハー、化合物半導体、半導体CMP等) 特殊銅板
		多層材料	半導体用多層プロセス材料 (OptiStack®)	オルガノソル・モノマーソル	電子機器用フィルム表面処理、樹脂添加剤
		EUV材料	EUVプロセス材料	オイル&ガス材料	シェールオイル・ガス採掘効率向上材

29 ページには、サブセグメント別のいつもの売上高イメージを載せております。

- ディスプレイ材料は、2022年度下期で12%減収、2023年度年間で9%増収予想
- 半導体材料は、2022年度下期で1%増収、2023年度年間で4%増収予想
- 無機コロイドは、2022年度下期で9%増収、2023年度年間で5%増収予想

主要製品	2022年度 実績					2023年度 予想				
	前年同期比					前年同期比				
	上期	3Q	4Q	下期	年間	1Q	2Q	上期	下期	年間
サンエバー	-12%	-6%	-16%	-11%	-12%	-7%	+28%	+8%	+8%	+8%
ディスプレイ材料合計	-13%	-7%	-17%	-12%	-12%	-7%	+28%	+8%	+9%	+9%
ARC®	+23%	-5%	-3%	-4%	+9%	-11%	-6%	-8%	+18%	+4%
多層材料	+31%	+6%	+15%	+10%	+20%	-4%	-19%	-12%	+9%	-2%
EUV材料※1	+60%	+47%	+11%	+28%	+43%	-6%	+4%	-1%	+45%	+21%
半導体材料合計	+26%	0%	+3%	+1%	+13%	-9%	-8%	-9%	+18%	+4%
スノーテックス	+6%	+17%	+8%	+12%	+9%	+7%	+7%	+7%	+12%	+10%
オルガノゾル・モノマーゾル	+10%	-13%	-20%	-17%	-4%	+18%	-15%	+1%	+11%	+6%
オイル&ガス材料	+94%	+182%	+98%	+131%	+114%	+21%	+5%	+12%	-16%	-5%
無機コロイド合計	+9%	+9%	+9%	+9%	+9%	+8%	0%	+4%	+6%	+5%
機能性材料セグメント合計	+6%	-1%	-5%	-4%	+1%	-6%	+5%	-1%	+13%	+6%

※1 EUV材料: EUV向け下層膜とSi-HMの合計

| 30

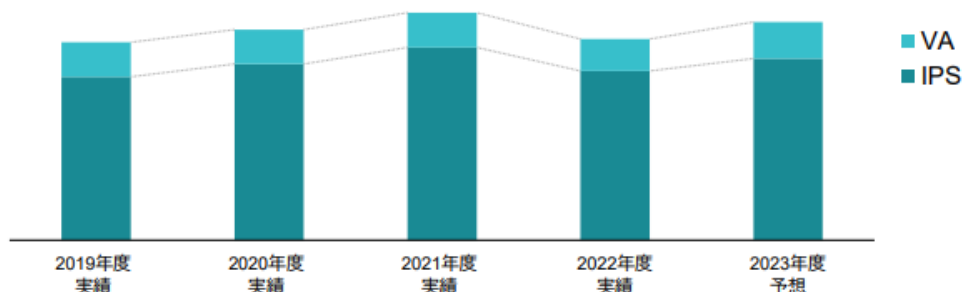
30 ページに機能性材料の各主要製品の売上高の前年同期比でのグロースを載せております。

まずディスプレイは22年度実績、下期では12%の減収でございました。22年度年間も同様12%の減収でございましたが、今期は9%の増収を予想しております。

半導体でございまして、22年度下期は1%の増収でございましたが、22年度年間では13%の増収。今期は主として下期からの回復を想定し、年間では4%の増収予想でございまして。

無機コロイドは22年度下期で9%増収、22年度年間でも9%増収、また23年度は年間5%の増収と想定しております。

- 2022年度は、ディスプレイ市場減速のため年間実績では12%減収も、前回業績予想比では上ぶれ
- 2023年度は、年間で8%増収予想、他モード(ラビングIPSなど)から光IPSへの転換は順調に進む



主要用途

- VA (Vertical Alignment) テレビ
- IPS (In-Plane Switching) スマートフォン、タブレット、PC、モニター、車載

モード別売上高成長率	2022年度 年間実績		2023年度 年間予想
	前年同期比	前回業績予想比	前年同期比
VA	減収(-0 ~ -9%)	上ぶれ	増収(+10 ~ +19%)
IPS	減収(-10 ~ -19%)	上ぶれ	増収(+0 ~ +9%)
サンエバー合計(TN*含む)	-12%	上ぶれ	+8%

※ TN(Twisted Nematic) 主要用途はPC、モニター

サンエバー、31 ページでございます。

冒頭記載のとおり、先ほど申し上げましたが、ディスプレイ市場減速のため22年度は年間で12%の減収でございました。この4Qは前回の業績予想比では上ぶれております。また23年度は年間で8%増収予想、光IPSの転換が引き続き順調に進むと想定しております。

【下期】売上高-15億円、営業利益-30億円、固定費増加合計18億円(共通費用増加1億円含む)

【年間】売上高+9億円、営業利益-22億円、固定費増加合計28億円※1(共通費用増加2億円含む)

(億円)

	2021年度 実績※2					2022年度 実績					前年同期比				
	上期	3Q	4Q	下期	年間	上期	3Q	4Q	下期	年間	上期	3Q	4Q	下期	年間
売上高	396	209	212	421	817	420	206	200	406	826	+24	-3	-12	-15	+9
営業利益	131	76	69	145	276	139	69	46	115	254	+8	-7	-23	-30	-22

※1 固定費の集計方法を変更。2021年度実績は遡及して再計算

※2 2021年度実績はセグメント区分変更後の数値に置き換え済み(p75,p76参照)

ディスプレイ	【下期】減収・減益 【年間】減収・減益	
	光IPS	【下期】【年間】とも減収
	ラビングIPS	【下期】【年間】とも減収
	VA	【下期】【年間】とも減収
	【下期】ディスプレイ市場減速、固定費増加2億円 【年間】ディスプレイ市場減速、固定費増加3億円	

半導体	【下期】増収・減益 【年間】増収・増益	
	ARC®	【下期】減収 【年間】増収
	多層材料	【下期】増収(一部顧客で在庫積み増し) 【年間】増収
	EUV材料	【下期】【年間】とも増収 特にEUV下層膜は順調に伸長、シェア拡大継続
	【下期】固定費増加11億円 【年間】固定費増加18億円	

無機コロイド	【下期】増収・減益 【年間】増収・利益横ばい	
	スノーテックス	【下期】【年間】とも増収(一般用途・研磨剤増収)
	オルガノ・モノマーソル	【下期】【年間】ともに減収
	オイル&ガス材料	【下期】【年間】ともに増収
	【下期】固定費増加4億円 【年間】固定費増加5億円	

| 32

機能性材料の数字は 32 ページをご確認ください。記載のとおりです。

それぞれのコメントは申し上げませんが、年間では営業利益で22億円減益でした。半導体は増益でしたが、ディスプレイの減益が上回ったということがございます。加えまして固定費の増加で28億円となっております。

【年間】売上高+49億円、営業利益+11億円、固定費増加合計23億円※1(共通費用増加1億円含む)

	2022年度 実績					2023年度 予想					前年同期比				
	1Q	2Q	上期	下期	年間	1Q	2Q	上期	下期	年間	1Q	2Q	上期	下期	年間
売上高	218	202	420	406	826	205	212	417	458	875	-13	+10	-3	+52	+49
営業利益	79	60	139	115	254	66	61	127	138	265	-13	+1	-12	+23	+11

(億円)

※1 固定費の集計方法を変更

ディスプレイ	【年間】増収・増益	
	光IPS	増収(スマホ・非スマホともに堅調)
	ラビングIPS	若干増収
	VA	増収(一部シェア拡大)
ディスプレイ市場回復、固定費増加4億円		

半導体	【年間】増収・減益	
	ARC®	増収
	多層材料	若干減収
	EUV材料	増収 特にEUV下層膜は順調に伸長、シェア拡大継続
半導体市場回復、固定費増加17億円		

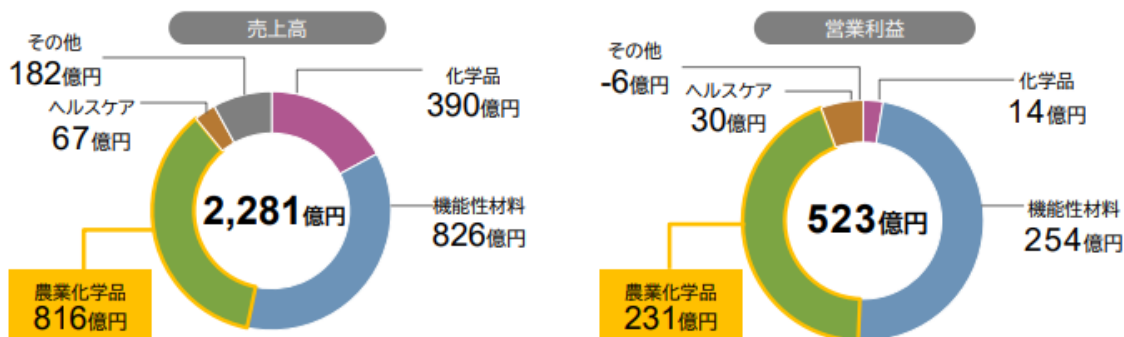
無機コロイド	【年間】増収・増益	
	スノーテックス	増収(一般用途・研磨剤増収)
	オルガノ・モノマーゾル	増収
	オイル&ガス材料	減収
固定費増加1億円		

| 33

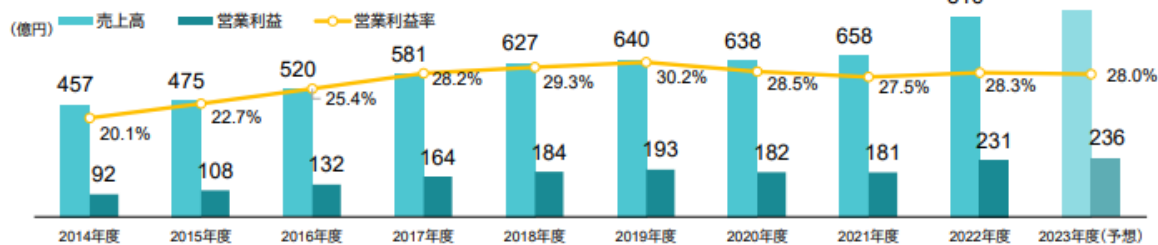
33 ページ、今期の予想でございます。冒頭記載のとおり、売上高では 49 億円の増収、また営業利益でも 11 億円の増益でございます。この中には固定費の増加によりセグメント全体で 23 億円の費用増を含んでございます。

個別には申し上げませんが、ディスプレイは増収増益、半導体は増収ですが、17 億円の固定費増がございまして減益と想定しております。無機は増収増益です。増収がストレートに効いてくる想定でございます。

2022年度セグメント別業績



農業化学品セグメント業績推移※1



※1 2022年4月に組織改定を実施。2014~2020年度実績は旧セグメント区分。2021年度実績はセグメント区分変更後の数値に置き換え済み(p75,p76参照)

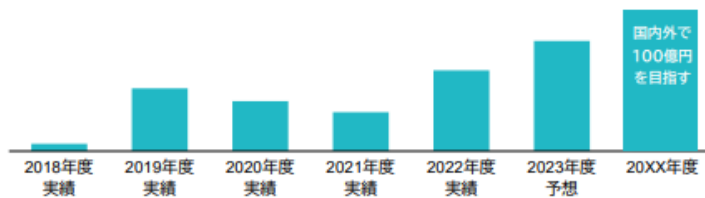
続きまして 34 ページ、農業化学品セグメントでございます。

右下のグラフのとおり、22年度は50億円の大幅増益となりました。今期はさらに5億円の増益という想定でございます。

■ 2022年度下期で12%増収、2023年度年間で3%増収予想

主要製品名 (農業:2022年度売上高順)	種類	2022年度 実績					2023年度 予想					
		前年同期比					前年同期比					
		上期	3Q	4Q	下期	年間	1Q	2Q	上期	下期	年間	
農業	ラウンドアップ ^{※1}	除草剤	+16%	-28%	+16%	+7%	+11%	+2%	+13%	+7%	+6%	+6%
	アルテア	除草剤	+31%	+18%	+7%	+8%	+12%	+12%	+17%	+13%	+9%	+10%
	タルガ	除草剤	+30%	+7%	+3%	+4%	+16%	-17%	-25%	-20%	-9%	-14%
	ライメイ	殺菌剤	+144%	+25%	+87%	+77%	+97%	-46%	+72%	-6%	+4%	+1%
	グレーシア	殺虫剤	+199%	+105%	+70%	+82%	+108%	+58%	+84%	+70%	+21%	+37%
	ダイセン	殺菌剤	+38%	+24%	+19%	+20%	+26%	-23%	+3%	-12%	-1%	-5%
	パーミット	除草剤	+190%	-22%	-29%	-25%	+20%	-4%	+51%	+36%	-36%	0%
動物薬	フルララネル	動物薬	+42%	+62%	+5%	+29%	+37%	-3%	-1%	-2%	+10%	+3%
セグメント合計 ^{※2}		-	+43%	+10%	+13%	+12%	+24%	-3%	+10%	+3%	+3%	+3%

■ グレーシア売上高



参考

- 国内農業販売 第1位 (2020年10月~2021年9月)
- [ラウンドアップの現状説明会資料](#) (2020年1月22日発表)
- [農業化学品事業説明会資料](#) (2022年9月28日発表)

※1 ラウンドアップALは、2022年度通期実績のラウンドアップ売上高全体の20%を占める
 ※2 セグメント合計の前年同期比は値引きを含む

主要製品の売上高成長率は 35 ページをご覧ください。

冒頭に記載のとおり、22年度下期では12%増収でございます。上期43%増収と合わせて年間では24%の大幅増収となりました。今期は3%の増収と、マイルドな数値を想定しております。

グレーシアの売上高も左下のグラフのとおり、21年度をボトムとして22年度、それから今期も相当程度の増収を期待しております。

フルララネル動物薬は表の最終行から2行目でございますとおり、前期は37%増収でございました。今期は3%の増収と想定しております。前期は以前ご説明しましたが、21年4Qから22年度上期に一部原薬出荷の後ろ出しがございました関係で、このような数字になってございます。

【下期】売上高+51億円、営業利益-2億円、固定費増加10億円※1

【年間】売上高+158億円、営業利益+50億円、固定費増加18億円※1

(億円)

	2021年度 実績※2					2022年度 実績					前年同期比				
	上期	3Q	4Q	下期	年間	上期	3Q	4Q	下期	年間	上期	3Q	4Q	下期	年間
売上高	250	119	289	408	658	357	131	328	459	816	+107	+12	+39	+51	+158
営業利益	69	30	82	112	181	121	31	79	110	231	+52	+1	-3	-2	+50

※1 固定費の集計方法を変更。2021年度実績は遡及して再計算

※2 2021年度実績はセグメント区分変更後の数値に置き換え済み(p75,p76参照)

主要製品	ラウンドアップ(除草剤)	アルテア(除草剤)	タルガ(除草剤)	ライメイ(殺菌剤)	グレーシア(殺虫剤)	ダイセン(殺菌剤)	パーミット(除草剤)	フルララネル(動物薬)
	【下期】増収(ML:価格上昇、AL:減収) 【年間】増収(ML:価格上昇、AL:横ばい)	【下期】増収(国内:価格上昇) 【年間】増収(国内:価格上昇、拡販)	【下期】増収 【年間】増収(輸出:好天候、混合剤拡販)	【下期】【年間】ともに増収(欧州での混合剤用途向け拡販により需要増)	【下期】【年間】ともに増収(国内:流通在庫解消により増収、輸出:新規国登録での拡販)	【下期】増収(国内:価格上昇、輸出:増収) 【年間】増収(国内:価格上昇、輸出:21年度下期から22年度へ出荷後ろ倒しにより増収)	【下期】減収(21年度は販売が下期に偏重) 【年間】増収(輸出を中心に増収)	【下期】増収(原薬出荷・ロイヤリティ収入ともに堅調) 【年間】増収(原薬出荷:2021年度から後ろ倒し、顧客在庫調整終了、ロイヤリティ収入:堅調)

| 36

具体的な数字は36ページでございます。22年度実績、主要製品ごとにコメントを書いております。全体として見れば、売上高はYoYで158億円の増収、営業利益は50億円の増益でございます。

【年間】売上高+26億円、営業利益+5億円、固定費増加11億円※1

(億円)

	2022年度 実績					2023年度 予想					前年同期比				
	1Q	2Q	上期	下期	年間	1Q	2Q	上期	下期	年間	1Q	2Q	上期	下期	年間
売上高	197	160	357	459	816	192	176	368	474	842	-5	+16	+11	+15	+26
営業利益	68	53	121	110	231	66	54	120	116	236	-2	+1	-1	+6	+5

※1 固定費の集計方法を変更

主要製品	製品名	増減
	ラウンドアップ(除草剤)	増収(ML:価格上昇、AL:数量増)
	アルテア(除草剤)	増収(国内:価格上昇、拡販)
	タルガ(除草剤)	減収(輸出:22年度インド好天候により販売好調)
	ライメイ(殺菌剤)	横ばい
	グレーシア(殺虫剤)	増収(国内:増収、輸出:アジアでの拡販、混合剤上市)
	ダイセン(殺菌剤)	減収(輸出:21年度下期から22年度へ出荷後ろ倒し)
	パーミット(除草剤)	横ばい
	フルララネル(動物薬)	増収(原薬出荷・ロイヤリティ収入ともに堅調)

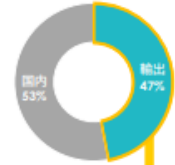
| 37

37 ページにございますとおり、23 年度予想は売上高で 26 億円、営業利益では 5 億円増益でございます。主要製品のコメントは記載のとおりでございます。

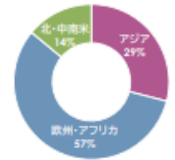
上市年度	製品名	分類	開発経緯	備考
2002	ラウンドアップ	除草剤	買収	米国モンサント社より国内事業を買収、継続成長中
2008	ライメイ	殺菌剤	自社開発	
2008	スターマイト	殺虫剤	自社開発	
2009	バルサー(チフルザミド)	殺菌剤	買収	米国ダウ社より世界事業を買収
2009	プレバソ	殺虫剤	導入	米国デュポン社より導入
2010	ラウンドアップマックスロードAL	除草剤	自社開発	一般家庭向け希釈済みシャワータイプ除草剤。2016年AIⅡ、2018年AIⅢ上市、急成長
2011	アルテア	除草剤	自社開発	2011年韓国で上市、2012年日本で上市
2013	フルララネル	動物用医薬品原薬	自社開発	米国MSD社 ^{※1} 向けにブラバクト [®] 原薬として出荷開始
2014	ブラバクト [®] ^{※2}	ペット動物用医薬品	-	2014年4月欧州、6月米国、15年7月日本で上市
2015	トレファノサイド	除草剤	導入	米国ゴーワン社がダウ社より買収、当社は国内販売独占権を継承
2017	ネクスター	殺菌剤	導入	スイスシンジエンタ社より導入
2017	トランスフォーム [®] /エクシード [®] /ヒレスコ [®]	殺虫剤	導入	米国ダウ社より導入
2017	エグゾルト [®] ^{※2}	家畜動物用医薬品	-	9月米国MSD社による、欧州でのニフトリ用製品上市
2018	グレーシア	殺虫剤	自社開発	広範囲の重要害虫に有効、ミツバチへの影響が少ない。2018年韓国、2019年日本、2021年インド・インドネシアで上市(ピーク売上高目標100億円)
2019	クインテック(キノキシフェン)	殺菌剤	買収	2019年11月米国コルテバ社より世界事業を買収。果樹野菜のうどんこ病(カビの1種)の発病予防に非常に効果的
2020	ダイセン(マンゼブ)	殺菌剤	買収	2020年12月米国コルテバ社より日本・韓国事業を買収。果樹野菜用の保護殺菌剤、耐雨性に優れる
2024	未定(ジメスルファゼット)(NC-653)	除草剤	自社開発	イネへの優れた安全性があり、抵抗性ホタルイや難防除雑草クログワイに高い効果を持つ(ピーク売上高目標35億円)
2025	未定(NC-520)	殺虫剤	共同開発	他社との共同開発の新規水稲用殺虫剤。ウンカ類への効果が高い(混合剤も含めピーク売上高目標25億円)
2027	未定(イブトリアノピリド)(NC-656)	除草剤	自社開発	抵抗性イネ科雑草(ヒエ・アザガヤ)に優れた効果を持つ。当社初の水稲用芽葉除草剤(ピーク売上高目標100億円)

※1 MSD社:米国メルク社のアニマルヘルス事業部門のMSD Animal Health 社の略称 ※2 ブラバクト[®]・エグゾルト[®]:MSD社の販売製品名 ※3 フルララネルを含める

農業化学品セグメントの輸出比率(2022年度実績)^{※3}



- 地域別分布



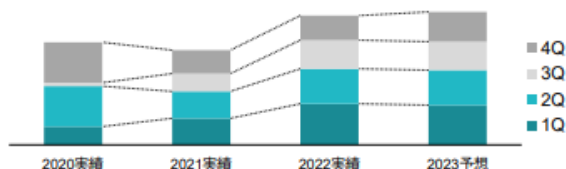
新製品群のピーク売上高目標合計
310億円

38 ページのパイプラインは特段、変更ございません。

■ 当社のフルララネル売上高の構成

MSD社へのフルララネル販売 + MSD社からのランニングロイヤリティ(RR)

■ 2020～2023年度 四半期別売上高推移 (RR収入含む)



■ 2019～2023年度 売上高推移イメージ (RR収入含む)



ロイヤリティ収入は、2020年度まで2・4Q計上であったが、会計方針の変更にもない、2021年度からは各四半期に計上されている(p74参照)

- ・フルララネルの在庫調整は2021年度で完了
- ・2022年度は、2021年度からの出荷後ろ倒しと円安影響により大幅増収。実績為替レートは136円/ドル
- ・2023年度の想定為替レートは128円/ドル

■ ブラバクト®の拡大に向けたMSD社の開発状況

- フルララネルを有効成分とするペット向けの新たな内外部寄生虫薬、家畜向け経皮投与剤等をMSD社が開発中
- 2023年5月 犬向け外部寄生虫注射剤BRAVECTO Quantum™が豪州にて承認(特徴:12か月※1の効果持続性)

※1 クリイロコイタマダニは11か月

40 ページでございます。いつもどおりフルララネルの売上高推移でございます。今回、少し記載を追加しております。右の緑のグラフの想定為替レートが今期 128 円と冒頭で申しあげました数字になっております。

最終行にメルク社の開発状況を書いています。この5月に犬向けの外部寄生虫注射剤が豪州にて承認されました。外部寄生虫薬における注射剤は非常に珍しいものです。効果として12カ月持続するのが特徴です。

- グローバルな安定供給と製造コスト削減を目指した新たな原体生産拠点
- 計画通り設立完了し、2022年度よりNBRを連結子会社に追加。2023年3月から商業稼動を開始

Nissan Bharat Rasayan Private Limited(NBR)概要

本社所在地	ハリヤナ(Haryana)州グルガオン(Gurgaon)(ニューデリー近郊)
工場所在地	グジャラート(Gujarat)州サイカ(Saykha)に新設 (土地は同州産業開発公社(GIDC)より賃借)
営業開始日	2020年4月1日
事業内容	当社の農薬(グレーシア、ライメイ等)原体を製造し、 当社へ販売
従業員数	約120名(2023年4月1日時点)
工場稼働時期	2022年度4Qより稼働開始
株主	当社70%、Bharat Rasayan Ltd(略称BRL)30%
取締役会	当社指名5名、BRL指名2名、中立1名、合計8名

資金計画 (2022年5月発表時点)

		(億円)	
設備投資	60	資本金	23
運転資金他	28	当社貸付	65
所要資金合計	88	資金調達合計	88

当社メリット

- 信頼できる経験豊富な現地パートナーの協力体制
- 有効成分の供給源の多様性・安全性確保と、原料不足リスクの低減
- 国内工場に比べて低い製造コスト
- すぐに利用できる工場用地(借地権の正式認可手続き完了済み)
- 既存の現地企業のM&Aに比べ、経営・財務リスクを大幅に軽減

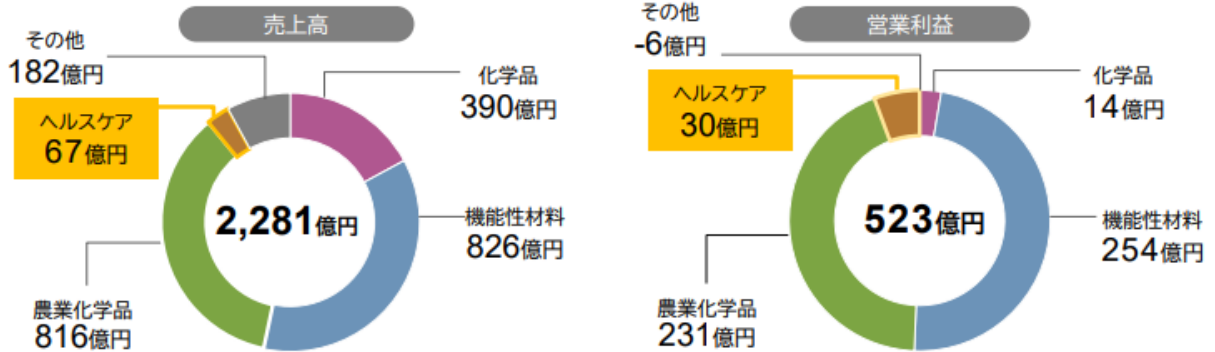
Bharat Rasayan Ltd(BRL)概要

設立	1989年(インド大手農薬製造販売会社)
上場	インド国立証取(NSE)、ボンベイ証取(BSE)
主要株主	グプタ(Sat Narain Gupta)会長等創業者一族75.05%
損益状況	2021年度売上高13,012百万ルピー、税引後利益1,760百万ルピー
工場	グジャラート州(Gujarat)ダヘジ(Dahej)、ハリヤナ州(Haryana) ロータク(Rohtak)の2工場
当社との関係	一部当社品を受託生産、グループ会社のBharat Certis Agriscienceが タルガ、バルサー、パーミットをインド国内で販売

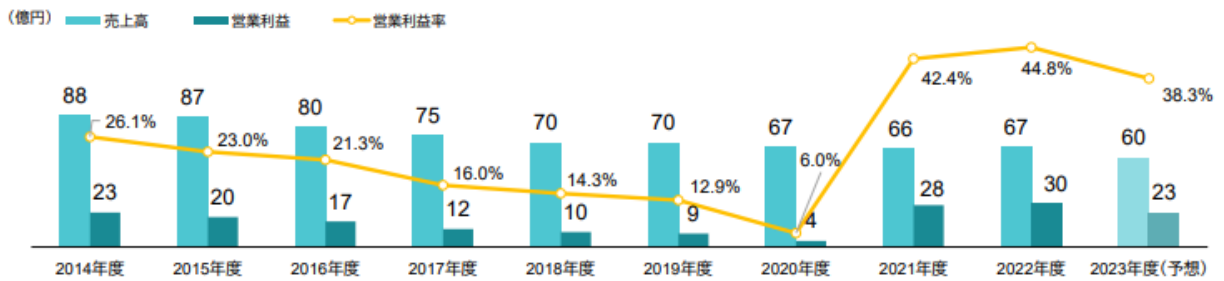
続きまして 42 ページでございます。

先ほど社長の八木が少し触れましたが、この合弁会社 NBR は既に 22 年度から連結子会社となっております。23 年 3 月から商業稼動開始となっております。

2022年度セグメント別業績



ヘルスケアセグメント業績推移※1



※1 2022年4月に組織改定を実施。2014～2020年度実績は旧セグメント区分。2021年度実績はセグメント区分変更後の数値に置き換え済み(p75,p76参照)

最後に 43 ページ、ヘルスケアでございます。22 年度は 21 年度対比で 2 億円の増益でございます。今期は 7 億円の減益を想定いたします。具体的な数字は 46 ページ、それから 47 ページを後ほどご覧ください。

ヘルスケアセグメント 2022年度実績 前年同期比

【下期】売上高+1.7億円、営業利益+1.0億円 【年間】売上高+0.8億円、営業利益+1.8億円

(億円)

	2021年度 実績					2022年度 実績					前年同期比				
	上期	3Q	4Q	下期	年間	上期	3Q	4Q	下期	年間	上期	3Q	4Q	下期	年間
売上高	33.4	19.2	13.3	32.5	65.9	32.5	15.9	18.3	34.2	66.7	-0.9	-3.3	+5.0	+1.7	+0.8
ヘルスケア	14.1	4.8	5.3	10.1	24.2	14.2	3.5	5.8	9.3	23.5	+0.1	-1.3	+0.5	-0.8	-0.7
ファインテック	19.3	14.4	8.0	22.4	41.7	18.3	12.4	12.5	24.9	43.2	-1.0	-2.0	+4.5	+2.5	+1.5
営業利益	13.8	9.2	5.1	14.3	28.1	14.6	6.6	8.7	15.3	29.9	+0.8	-2.6	+3.6	+1.0	+1.8
ヘルスケア	5.2	1.5	1.7	3.2	8.4	6.3	1.0	2.0	3.0	9.3	+1.1	-0.5	+0.3	-0.2	+0.9
ファインテック	8.6	7.7	3.4	11.1	19.7	8.3	5.6	6.7	12.3	20.6	-0.3	-2.1	+3.3	+1.2	+0.9

※ p19,p20,p21,p71,p72,p73では億円未満を四捨五入して表示しており、これにより本ページの数字と合致しない場合がある
 ※ 2021年度実績はセグメント区分変更後の数値に置き換え済み(p75,p76参照)

ヘルスケア	【下期】減収・利益横ばい 【年間】減収・増益	
	リバロ	【下期】減収(国内減収、輸出増収) 【年間】横ばい(国内減収、輸出増収)
	【下期】【年間】ともに固定費減少(増益要因)	

ファインテック	【下期】増収・増益 【年間】増収・増益	
	【下期】【年間】ともに増収	

| 46

ヘルスケアセグメント 2023年度予想 前年同期比

【年間】売上高-6.3億円、営業利益-6.8億円

(億円)

	2022年度 実績					2023年度 予想					前年同期比				
	1Q	2Q	上期	下期	年間	1Q	2Q	上期	下期	年間	1Q	2Q	上期	下期	年間
売上高	16.5	16.0	32.5	34.2	66.7	18.8	13.7	32.5	27.9	60.4	+2.3	-2.3	0.0	-6.3	-6.3
ヘルスケア	8.3	5.9	14.2	9.3	23.5	6.1	5.6	11.7	10.6	22.3	-2.2	-0.3	-2.5	+1.3	-1.2
ファインテック	8.2	10.1	18.3	24.9	43.2	12.7	8.1	20.8	17.3	38.1	+4.5	-2.0	+2.5	-7.6	-5.1
営業利益	7.6	7.0	14.6	15.3	29.9	9.7	5.5	15.2	7.9	23.1	+2.1	-1.5	+0.6	-7.4	-6.8
ヘルスケア	3.9	2.4	6.3	3.0	9.3	2.7	2.1	4.8	2.6	7.4	-1.2	-0.3	-1.5	-0.4	-1.9
ファインテック	3.7	4.6	8.3	12.3	20.6	7.0	3.4	10.4	5.3	15.7	+3.3	-1.2	+2.1	-7.0	-4.9

※ p19,p20,p21,p71,p72,p73では億円未満を四捨五入して表示しており、これにより本ページの数字と合致しない場合がある

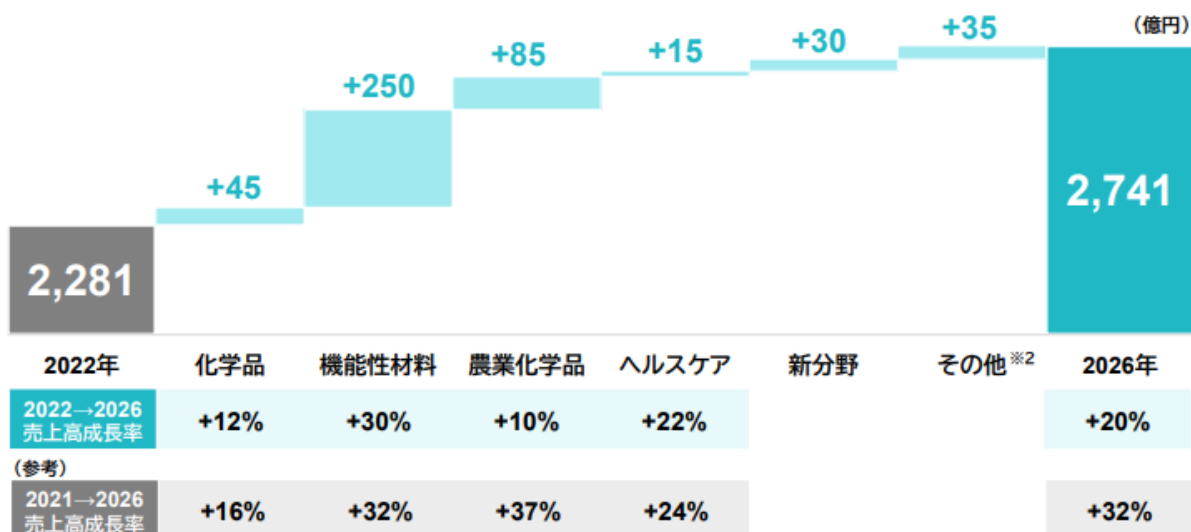
ヘルスケア	【年間】減収・減益	
	リバロ	減収(国内減収、輸出横ばい)

ファインテック	【年間】減収・減益	
	減収(受託品の顧客在庫調整、ジェネリック原薬の価格調整)	

| 47

2026年売上高イメージ(全社)

全社合計で、2022年実績2,281億円に対し、2026年は20%増の2,741億円のイメージ



※1 増減は5億円刻みで表示

※2 卸売・その他・調整額

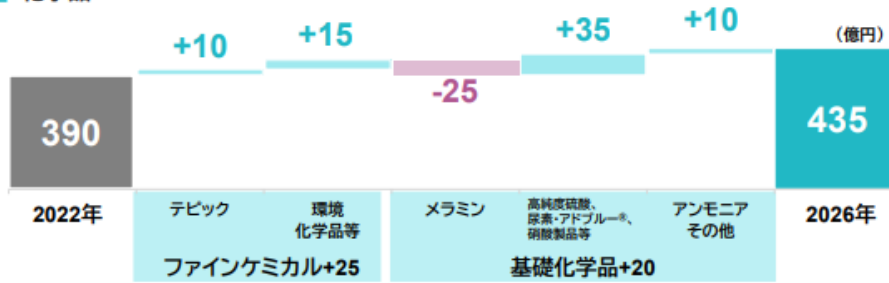
今回、2026年度売上高イメージについて49ページから少しご説明いたします。

中計を見直したわけではございませんが、今年も含めまして4年後の26年度の姿をあくまでも売上高のイメージとして22年度対比でお示ししております。イメージですので、5億円刻みで表示しております。

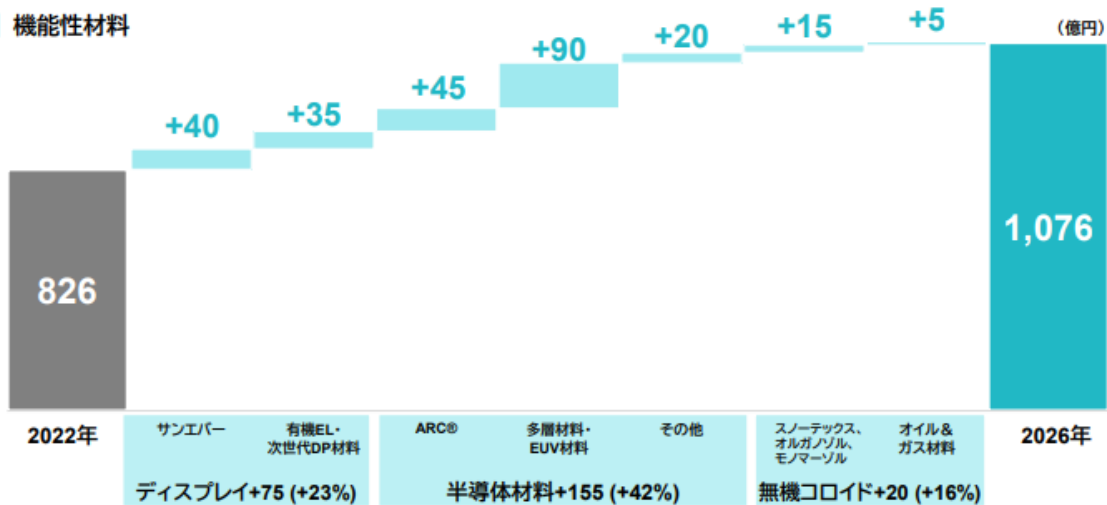
ここに書いてございますとおり、22年度の2,281億円から化学品ではこの4年間で12%増収、機能性材料では30%増収の250億円の積み上げ、農業化学品では10%増収の85億円の積み上げ、ヘルスケアでは22%の増収。これらを合わせまして、会社全体では4年間の単利伸び率は20%を想定いたします。参考として一つ下の行に21年度から5年間のグロースを載せております。農業化学品は先ほど来申し上げていますように、22年度で大幅に増収したことが数字に表れております。

2026年売上高イメージ(化学品・機能性材料)

化学品



機能性材料



※ 増減は5億円刻みで表示、機能性サブセグメントの増減率は4年間の売上高成長率

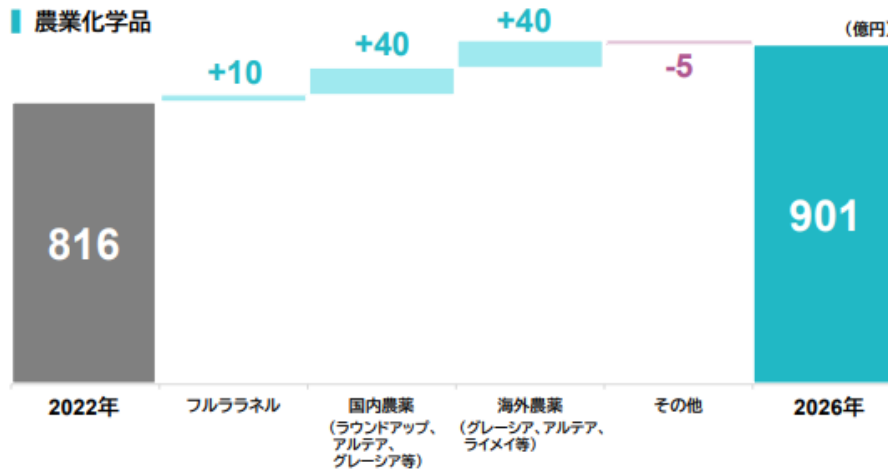
| 50

以下、セグメントごとに説明します。まず 50 ページでございます。簡単にご説明いたします。

上段の化学品は 390 億円に対して 26 年度は 435 億円。ファインは左側、プラスの 25 億円、テピックあるいは環境化学品等で増収を計画いたします。基礎化学品もメラミンの生産停止によります 25 億円の減収をカバーして、ここに記載のと通りの数字を計画してございます。

機能性材料は下段でございます。22 年度 826 億円でございます。ディスプレイでは 4 年間で 23%増収、半導体は足元、調整局面ではありますが、中長期的には 2 桁成長が続くと想定し、4 年間で 42%増収、プラス 155 億円です。無機コロイドも 16%増収でございます。

2026年売上高イメージ(農業化学品・ヘルスケア・新分野)



■ 新分野(増加額:合計30億円)

分野	製品
情報通信	FOWLP用RDL材料 光配線材料
環境エネルギー	二次電池材料

※ 増減は5億円刻みで表示

| 51

次の 51 ページは農業化学品です。上段、21 年度から大幅に増収した 22 年度を発射台としてフルララネルで 10 億円増収、国内農薬はラウンドアップ、アルテア、グレーシア等でプラス 40 億円。海外農薬でも同様の金額です。グレーシア、アルテア、ライメイ等が増収する計画でございます。

最後にヘルスケアでございます。82 億円で 15 億円増収を想定いたします。リバロの減収はどうしても不可避だと思えます。それに対してヘルスケアでは医療材料、またファインテックでは記載のとおり増収を計画いたします。

新分野で右に書いてございますように、情報通信・環境エネルギーでそれぞれいくつかの製品を積み上げていき、30 億円程度を想定してございます。

昨年後半から機能性材料におけるスローダウン、あるいは動物薬フルララネルの状況でも、今後十分に成長していけるポートフォリオであることをイメージとしてお示ししたいことから、今回ご説明いたしました。

E (環境) S (社会)	2021年4月	ダイバーシティステートメントおよびダイバーシティビジョンを設定
	2022年5月	2050年にカーボンニュートラルへ温室効果ガス(GHG)排出削減長期目標を設定(詳細はp60参照)
	2022年6月	メラミン停止によるGHG削減(26千トン、2018年度実績の約7%に相当)
	2022年6月	気候変動対策委員会設置
	2022年9月	「 統合レポート2022 」を発行
G (ガバナンス)	2019年4月	指名・報酬諮問委員会設置(取締役会の任意の諮問機関)
	2019年6月	取締役等を対象に業績連動型株式報酬制度導入(株式給付信託)
	2022年6月	役員報酬体系にESG指標を組入れ(基本報酬65%、業績報酬28%、株式報酬7%、業績報酬28%のうち、利益連動部分90%、ESG連動部分10%)
	2022年6月	「 コーポレートガバナンス報告書 」を更新(取締役会のスキルマトリックスを含む)
	2023年6月予定	女性取締役(社外)2名選任(選任後、取締役は計10名、うち社外4名)

最後に ESG トピック、53 ページでございます。最後の行にございますとおり、この6月に株主総会承認という条件ではございますが、社外取締役、現状1名女性でございますが、1名追加して2名にいたします。

私からは以上でございます。

質疑応答

<質問者 1>

Q: 先ほど Vista2027 につきましてご説明いただきましたが、24 年度計画の営業利益 585 億円、27 年度計画の 670 億円に向けた進捗について。終わった期、少し半導体の下ぶれ等で下に行きましたけれども、この辺りの見通しについていかがでしょうか。

A: 機能性材料は、これからまた上ぶれの方向に動いていく見通しです。それから農業化学品が次のパイプラインを抱えており、基本的に機能性材料と農業化学品がしっかりと引っ張っていってくれるという見通しです。また、新製品も開発が進んでおりまして、この中計の間に上市される見通しと考えております。

Q: 2 つ目が、先ほど微生物制御と情報科学の技術という 2 つのお話がありましたけれども、26 年度までの売上の中で、具体的に製品としてこの 2 つの技術で新しく見込めるという部分はありますでしょうか？

A: 微生物制御については、この中計期間で上市される状況ではなく、この中計期間は技術をしかりと積み上げていく、種を撒いている状況です。ただ、いくつか微生物剤に関わる試験も始まっておりますので、今後しっかりと育てていきたい。

<質問者 2>

Q: まず 1 問目、化学品に関連してです。メラミンの生産を昨年 6 月に停止されて以降、今後さらに構造改革を進められるご意向があるのか。先ほどアンモニア系事業の収益性の改善施策を推進というお話もありました。化学品事業で製品ポートフォリオ、もしくは生産能力の見直しを検討される可能性があるのか。国内の他の素材産業を見ていますと、生産能力の縮小の動きも目立ってきていると思います。コメントいただけますか。

A: まずアンモニアの誘導体に関わるシアヌル酸、さらにその先のテピックについては、中国勢の動きもありますが、しっかりと生産能力として確保していきたい、さらに値上げや拡販を狙っていきたくて思っております。それから化学品の中では、高純度硫酸などの高純度薬品類の半導体用製品は今後もさらに展開を図っていきたくて思っております。尚、事業縮小の方向は現時点では持っておりません。

Q：2 問目は先ほどご説明いただいたアニマルケア企画グループをこの 4 月に新設された点についてです。動物用医薬品については、フルララネルに依存した状態が暫く続いていたと思うが、さらに違う原体の開発をより積極的に進められるということなのか。他社から剤を M&A で手に入れる可能性なども含め、動物薬の取り組みに関して今までとどういった変化が起きそうなのか、コメントいただけますか。

A：動物用医薬品は、今のフルララネルに続く次の剤を開発していきたいのが 1 つです。それからパートナーであるメルク社とも新規剤の共同研究も含めて、あらゆる可能性を持ちながら協議していきたい。動物用医薬品の展開を次のパイプラインとして、いろいろ探っていく方向で動いているところです。

< 質問者 3 >

Q：1 つ目、2050 年に向けての考え方でお願いします。卸売事業の位置づけは継続事業としての位置づけでいいのか、それともメーカーとしての機能にリソースを集中させる選択肢もあるのか。卸売事業の今後の方向性、事業の継続性についてお願いいたします。

A：私どもにとって卸売は大変重要な機能です。さらなる拡販も含めて、今後も継続させていくという考えでおります。

Q：2 問目、ヘルスケアの事業についてです。他の農業化学品、機能性材料の売上高、営業利益の規模感からすると、少し迫力が足りないと思っています。2026 年度までだとそこまでの利益的な飛躍はないと思いますが、そこから先のストーリーとしてヘルスケア事業が大きく成長していくのか、どのような問題意識をお持ちか、お願いいたします。

A：まず現行のリバロがジェネリックの浸食の影響で少しずつ減ってきておりますが、パートナーと新たな用法を探りながら、増やせるものは増やしていきたいと考えている。

また、新しく核酸医薬の研究・開発を進めておりますが、ご存知のように医薬は化合物を見つけてから上市されるまで、10 年とか 15 年というタームです。ここを狙って今、核酸医薬にリソースもウエートを置いて開発研究しているところがございます。そこに期待したいと考えております。

<質問者 4>

Q: まず1問目は農業化学品の新年度の見通しに関してです。37ページなどでいただいておりますが、新年度、昨年12月に国内での値上げが通っていたり、インドでの新工場によって原価を抑える効果があったりといった側面もあると思います。売上高26億円の増収に対して5億円の増益に留まる要因をもう少しご解説いただけますでしょうか。また固定費の集計方法の変更についても簡単にご言及いただけますか。

A: 1つ大きな原因は今おっしゃったように固定費の増加でございます。固定費の集計方法の変更をもう少し具体的に言うと、海外現法・海外子会社で従来集計して固定費等に入っておりました一部の数字をもう一度精査いたしました。海外現法のオペレーションもだんだん大きくなりますので、一旦、ピュアな固定費ではないもの、具体的には在庫の変動等も含めたものを固定費の集計から外し、在庫変動等のその他に組み直しました。影響額は農業化学品ではそれほど大きなものはありません。

もう1つはフルララネルという動物用医薬品です。今期は売上高で言えば3%増収とかなりマイルドな数字になっております。22年度はご存知のとおり、21年度までの在庫調整が終わりまして相当、原薬出荷が増えました。加えて、21年4Qから22年上期へ後ろ出しもありました。そここの比較になりますと、数字としてかなりマイルドなものになってございます。

いずれにしても37ページ記載のとおり、ラウンドアップ、アルテア、グレースシアも引き続き増収に努めてまいります。また、ご存知のとおり、国内一般農薬が昨年12月から値上げしてございます。このプラスも一定程度見ておりますが、特に農薬は下期にかなり大きな売上が立ちますので、既に昨年12月から値上げしている部分は23年度の昨年対比でのプラス影響はかなり限定的と想定しております。

Q: NBRの貢献についても言及いただけますか。

A: NBRは今年3月に商業生産開始でございます。ここの利益の増益寄与は連結ベースで一定程度見込んでいますものの、商業生産が始まったばかりということもありまして、かなり硬めに置いている想定とご理解いただければと思います。

Q: 2問目は機能性材料事業についてです。御社のディスプレイ材料と半導体材料の今期の方向感を教えていただけますか。

A: まずディスプレイはこの23年1Q及び2QはQoQで増収と想定しております。それから下期になりますけれども、HoHでいえば、23年の下期は23年の上期対比でも増収という想定でござ

います。それから半導体は23年1QのQoQは若干の増収、2Qは増収、HoHでは、23年の下期は23年の上期対比で2ケタ%台の増収という想定でございます。

Q: 御社の材料に関して顧客側で在庫が溜まっているご感触があるのか。実際の引き合いとして2Qの回復はある程度見えてきているのかについても言及いただけますか。

A: 当社の顧客サイドで保有されている在庫が想定以上に溜まっていることはないと理解しております。それから1Q、2Qのカーブでございますが、ディスプレイは1Q、2Qともほぼ同じスピードで伸びていく想定です。ここは昨年、22年2Qがボトムで、ここから徐々に回復しており、そういうトレンドは変わらないと見ております。

半導体は1Qに対して2Qが増収になっております。そこは少しずつ、まずロジックから始まり、徐々に回復して、本格的には下期からという想定でございます。

Q: 実際に半導体で御社への引き合いが強まっている事象は現時点で確認されていますか。

A: 今年2月頃が当社の予算作成時点になりますが、その時点で想定していた数字をここに載せてございます。現状、顧客の動向を見ながら精査している段階でございます。

<質問者5>

Q: 1点目、フルララネルについてです。米国の特許の延長自体は決まっているけれども、いつまで延長されるか、まだ決定していないと理解しておりました。その後、アップデートはございますでしょうか。

A: 米国の特許の件でございますが、39ページに記載のとおり、現在延長申請中で、その後のアップデートは特にございません。

Q: 2点目は半導体材料に関してです。下期の回復の確度、今見えているシェアの拡大があるとか、マーケットをアウトパフォームできる要素があれば、コメントいただきたいです。

A: 下期への見方ですが、かなり先端のプロセスが複雑になっていますので急にアウトパフォームするようなものは、なかなか申し上げられません。マーケットの回復とともに戻ってくることでシェアを維持すると想定しております。

Q: メモリメーカーの最大手が4月あたりから減産を開始されている中で、1QのQoQで若干の増収と先ほど伺いました。その確度はいかがでしょうか。

A：数字を置いた時点で考えますと、若干の増収が期待されるということですが、今、実際の売上の進捗を含めまして、精査しているのご理解いただければと思います。

Q：ご計画を策定された時点ではメモリメーカー最大手の減産の発表はまだなかったという時間軸でしょうか。

A：はい、そのとおりでございます。

以上